
バカとテストと金の死神～文月学園リリカル騒動記

金色の戦姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと金の死神〜文月学園リリカル騒動記

【Nコード】

N3201U

【作者名】

金色の戦姫

【あらすじ】

西暦20XX年、日本。

とある私立高校で画期的なシステムが導入された。

そして今年もそのシステムに則って激しい戦いが繰り広げられる…。

この作品は、とあるなのは公式SSコミックを参考にしています。
9割方作者の妄想ですので両作品のイメージを大事にしたい方はご注意ください。

タイトル変更しました。

人物設定（前書き）

祝・バカテス二期開始！

ってことで唐突に思い付き割と勢いで書いてます。

人物設定

「バカテス」側のキャラは基本、原作に準拠しているのどこでは「なのは」のキャラを載せています。

フェイト・ハラオウン

人種的にはイタリア人だが日本生まれの日本育ち。

本編の主役で私立文月学園高等部二年生。

振り分け試験当日インフルエンザで病欠となり、追試すら受けられなかったためFクラスに。

本来なら教員にも太刀打ちできる程の優等生。

高町なのは

フェイトの小学生時代からの親友。

文月学園ではBクラス。

現国・古文・英語といった文系科目が苦手。

文月学園がある海鳴市の、駅前にある喫茶店・翠屋の娘。

八神はやて

フェイト・なのはの小学生時代からの親友。

文月学園ではAクラス。

生まれも育ちも東日本だがなぜか関西…京都弁っぽい言葉で話す。

3人の姉があり、3人とも文月で教師をしている。

姉妹全員日独のハーフ。

八神シグナム

文月学園高等部体育教師で剣道の達人。

はやての姉で八神家長女の27歳。

「鉄人」こと同じ体育科の西村宗一ほどではないが、生徒にはかなり厳しい。

八神シャマル

文月学園高等部養護教諭ではやての姉、25歳。

料理は『普通に』苦手だが生徒や教師達の人気は高く文月の癒しとなっている。

八神ヴィータ

文月学園高等部数学科教諭にしてはやての姉。

小学生に間違われるほどの低い背丈だがこれでも一応23歳。

大検経由で教師になった為5年目となる『文月学園の奇跡』。

年齢的には姉になるはずのはやてにも、なぜか妹扱いされている。

20代にして趣味がゲートボールという少々変わった嗜好をしている。

進級（前書き）

なのはサイドの追加キャラです。

リンディ・ハラオウン

フェイトの母で女性ながら一家の大黒柱。

最近では息子もいるので、いい意味で力が抜けている模様。

関東一の美女が多い街…とされる海鳴で奇跡的な程の若さを保っている事から

『海鳴の人魚姫』という、トップクラスに挙げられている美女達の一人。

年齢は秘密。

クロノ・ハラオウン

フェイトの兄で22歳。

フェイトからお兄ちゃんと呼ばれると狼狽するほどの照れ屋。

エイミイ・ハラオウン

クロノの妻…フェイトから見れば義姉にあたる。

クロノの2つ上彼とは中学時代からの付き合い。

クロノの高校卒業後すぐに入籍し、今では3歳になる双子の親。

ちなみにクロノ卒業直前に身籠っているが、どうにか隠し通して卒業後の妊娠と誤魔化し出産。

カレル・ハラオウン

クロノとエイミイの息子で3歳。

親以上に叔母のフェイトになつており、わがママを言つてフェイトやエイミイ達を困らせている。

リエラ・ハラオウン

カレルの双子の妹。

フェイトの事を「優しくてカッコいいお姉ちゃん」と慕う。

アルフ・ハラオウン

フェイトの双子の妹。

少し離れた別の私立高校の2年生で16歳。

いい意味で「男っぽい」といえる性格からか、上級・同级・下級問わずに慕われている。

文月に進まなかった理由は成績が良くも悪くも平均的で、事あるごとに姉と比較されるのを恐れたから。

「体を動かすのが好き」と公言している通り、姉にも劣らない見事なスタイルを誇る。

とりあえずこんな感じ。

まだまだ増えるかも？

進級

西暦20XX年、日本。

太平洋沿岸に位置する中堅都市、海鳴市。

ここは一見普通の私立高校である文月学園高等部。
そう…ここは他とは一線を画する特色があるのだ。

文月学園高等部の2年生になった私こと、フェイト・ハラオウンは
新学年の初日から全力疾走していた。

何でって…それは勿論家を出る時間が遅かったからに他ならない、
寝坊で。

正門には、以前から親交の深い八神家の長女で体育科教諭でもある
…シグナムが立っていた。

「お、ハラオウン…珍しくギリギリだな、寝坊か？」

「そうです…ね」

「…いや、間に合ったから構わないが…次からは気をつけるんだぞ
？」

シグナムは、一通の封筒を取り出して私に手渡す。

「お前の『結果』だ…」

解っていると思うが自分でチャンスを潰したんだ。

文句は一切言っなよ？」

「解ってます…シグナム」

「こら、校内では『先生』をつけて呼べと何度言えば解るんだ!？」

「あははっ…すみません、シグナム『先生』！」

「全く…年長者をからかうものじゃないぞ」

気になる封筒の中は一枚の紙切れだった。

『フェイト・ハラオウン

上記の者を振り分け試験の結果により2年Fクラスとする。

―文月学園高等部学園長・藤堂カヲル』

……。

ま、振り分け試験の追試は自分で拒否した訳だし仕方ないよね。
1年間頑張ろう。

「…フェイト・ハラオウンです。

振り分け試験の日は病欠で追試も受けられなかったのでFクラスになっちゃいました。

こんなうっかりな私ですが皆さん1年間宜しくお願いします」

私と同じように、Aクラス確定といわれていた優等生姫路瑞希と共に自己紹介を済ませる。

…どうやら彼女は振り分け試験の最中、風邪のせいで倒れたために0点となっちゃったらしい。

その日の昼休み、旧校舎の屋上にて。

「…じゃ改めて自己紹介といくか。

俺は坂本雄二、Fクラスの代表をしてる」

「…同じくFクラスの吉井明久です。

まさかこうしてAクラスの八神さんやBクラスの高町さんと昼休みを共にできるなんてね」

「…あれ、フェイトちゃんから聞いてない？

私達3人は小3の頃からの親友同士なんだよ。

改めて…Bクラスの、高町なのはです」

「…Aクラスの八神はやてや、よろしゅうな。

フェイトちゃん共々仲良うして貰えると嬉しいな」

「え、Fクラスの姫路瑞希です…」

「Fクラスの島田美波。

長年ドイツにいたから古文とかは苦手だけど…」

「……土屋康太」

「土屋よ、味気無さ過ぎやせんかのう？

ワシは木下秀吉、演劇部に所属しておる。

クラスは…恥ずかしながらFクラスじゃ」

「えっと…木下さんは何で男子の制服着てるの？

それも部活の一環？」

「…せや、それは私も気になったんや」

あ、2人共勘違いしてる。

2人の一言に動揺する秀吉くん。

「お、お主らまで…！！

…何故下の名前で気付かぬのじゃ！？

高町殿はともかく八神殿は姉上から聞いてると思っておったのに…！！」

顔を見合わせる、なのはとはやて。
私は何とか間違えなかったけどね。

「だって…ねえ？」

その顔と声で男の子なんて言っても普通は誰も信じてくれないと思うけど？」

「せやな」

「うう、ワシを正しく認識できるのはハラウンしかおらぬのか…！？」

2人共意外と酷いなあ。

「と…ところで！」

気になってたんですけど…八神さんって、もしかして先生達と関係が…？」

強引に、話題を変えようとする美波。

「ん…そうやな。」

体育科のシグナム先生も、数学科のヴィータ先生も…養護のシャマル先生も私のお姉ちゃんや。

私達姉妹はみんな、日独のハーフなんやで。

私だけは、お母さんがどうしても日本的な名前がいいって頼んだらしいけど。

あ、日本生まれの日本育ちやからドイツ語はほとんど話せへんよ。簡単な会話ならできん事もないけど…」

和気藹々（わきあいあい）とした雰囲気の話と各々の箸が進む。すると突然、はやてが皆にこんな事を言った。

「…そう言えば、フェイトちゃんもかなりお料理上手なんよ…のはちゃんや、私に負けないくらい」

「ふえ！？」

は、はやて突然何を!?」

「そだね〜…何たって毎日家族7人の食事とお弁当を作ってるんだから。」

…成績は優秀でスポーツも万能、性格も良くて抜群の器量で家事もこなせる。

『一体どこの完璧超人?』って話だよね」

「な、なのはまで…!!」

「…ただ、うっかりミスが目立つのが欠点…と言えば欠点かも」

「まあ、それすらも愛嬌…いや、むしろ萌え要素って奴かもしれないな?」

…ニヤニヤと悪魔の笑みを浮かべつつ、私をからかうのはとはやて。

あ…美波が凄い形相で私を睨みつけてる。

えっ、私何もしてないよ…何で睨まれるの?

「羨ましすぎて、逆に腹が立ってくるわね…!

特に、胸の辺りが…!!

瑞希と同格なんて羨まし…じゃない、憎いわ…!!」

私以外気づかないくらいにとっても小さな声で悔しさを口にする美波…え、え?

5限開始が迫ってきたし、みんなお昼も済ませたので機会があればまたこうして集まろうと約束し自分達のクラスへと戻っていく。

夕方、買い出しの為近所の大型小売店に寄った私。

ちなみにまだ家には帰ってないので、制服のまま来ているから結構
…いやかなり目立ってる。

『…ほら、文月学園の制服着てるわよ?』

『本当…賢そうなお顔しているしあの子もAクラスの生徒かしら?』

…先程から地元の奥様方がヒソヒソと話しているのが聞こえてくる。
文月学園のシステムは世界唯一なのでかなり有名。

当然、振り分け試験によるヒエラルキーも広く世間に知られている
訳で…。

『…それにしても、綺麗な子ね。』

あんな子と一緒にクラスになれば、それだけで幸運なんじゃない
?。』

わざとらしく視線を向けて気づいた素振りをする。

すると2人は『あらやだ、聞こえてた…!?』と小声で驚き、早足
でそこを離れていった。

内緒話は当人に聞こえないようにするべきだと、私は思う。

気を取り直し、買う商品をバスケットに入れていると突然声をかけ
られた。

「よう、学校帰りに食材の買い出しか?
お互い大変だよな」

驚いて声のした方を向くとクラスメイトの坂本くんが立っていた。

「坂本…くん?

…お互いって、坂本くんも家では食事当番なの？」

「…ああ、言って無かったよな。」

俺のお袋は壊滅的に料理が下手でな…一人っ子だから半ば強制的に俺がやる事になっちまってるんだ。

掃除洗濯の方は、ちゃんとやってくれる分助かってはいるんだが…。それにしても7人も家族がいると、買物だけでも大変じゃないか？」

第一印象は意地悪で皮肉屋って感じだったけど…結構優しいのかな？

「割と何とかなるよ。」

小さい頃は食材の配送とか利用してたからね。

料理も、今は義姉^{あね}が一緒だし…妹も手伝ってくれてるからかなり楽ではあるよ」

「そうなのか…。」

だが随分買っような、一人で持って帰れるのか？」

「ああ、義姉に迎えに来て貰ってるから…あ、あれが私の義姉と妹だよ」

やって来たのは暗い茶髪でショートカットの女性と、強く橙がかつたブロンドでロングヘアの少女。

「お待たせ…ってあれ、お友達？」

「…うん、クラスメイトの坂本雄二くん」

坂本くんの方に向き直って2人を紹介する。

「紹介するね、私の義姉のエイミィと妹のアルフ」

『よろしく！』

坂本くんは2人と握手した後、私にかなり小さな声で聞いてくる。

「…おい、エイミィさんはともかくアルフはホントにお前の妹か？
二卵性の双子とか言っても無理ありすぎだろ！？」

失礼な。

「よく聞かれるんだけど、私とアルフは正真正銘血の繋がった姉妹だよ」

「なんか釈然としねえが…まあいいか、そういう事にしといてやるよ」

…嘘なんか、一つも言っていないのに。

買い物を済ませて、4人で仲良く店を出る。

義姉が坂本くんに、送っていくよと言うが…彼はすぐ近くだからと遠慮した。

なんか凄く焦ってたような気がするけど…？

ようやく家に着き、荷物を下ろす。

『おかえりなさい！！』

二つの幼い声が響く。

義姉と兄・クロノの子供…私にとっては甥と姪になるカレルとリエラ。

2人も二卵性の双子…私の周囲って双子多くない？

木下姉弟、私とアルフ。

カレルとリエラ…双子って本来ならかなり低い確率のはずだけど…。

「フエイトおねえちゃん、遊ぼうよ〜！」

「…だめよ、お姉ちゃんは学校とかで疲れてるの。後で遊んで貰いなさい」

『え〜！』

せがむカレルを叱る義姉、リエラも一緒になって不満を漏らす。

「お帰り、フエイト」

「あれ、母さん？」

こんな時間に居るなんて、珍しいね…お仕事は？」

「会社の皆が気を効かせてくれてね…後の事を任せてきちゃった」

そう言つて悪戯っぽく笑うのは…エメラルド色の髪と同色の瞳を持つ、私の母のリンディ・ハラオウン。

「そうなんだ…」

姉にしか見えない程若いがこれでも50近

「フエイト〜？」

個人情報勝手にバラしちゃ駄目でしょう…？」

「ひ…っ!？」

いつもより数段低い、俗に言う「ドスの効いた声」で私に脅しをかける母。

…な、何でわかるの!？」

相変わらず、こういう勘は人間離れしている…本当に謎な人だ。

私と母と義姉と妹の4人で夕食を準備する。

兄も帰ってきて進級祝いを兼ねた家族7人の団欒。
こうして、新学年の初日は概ね何事もなく終わる。
しかし、Fクラスの戦いはこの後割と早目に始まりを告げるのだっ
た。

進級（後書き）

突然ですが質問です。

スバルとティアナ、エリオやキャラは出した方がいいですか？

他に「絶対にこのキャラは出して！！」という要望などありましたら…

感想にて受け付けます。

…あ、エピソードの要望も同時募集で。

お寄せ頂いた要望は構成の兼ね合いを考慮した上で、可能な限りは極力反映していきたいと思っています。

開戦（前書き）

Dクラス戦です。

キャラクターの名前が原作と異なるのは仕様ですのでツツコミ勘弁願います。

今後も、原作と違う名前のキャラが出てくるかもしれません。
ご容赦ください。

あと随所に他作品のネタが散りばめられています。

開戦

新年度2日目。

「ところで、ハラオウンは補充試験受けないのか？

振り分け試験は病欠、補充試験も受けてませんじゃあ全教科0点のはず。

そんなんじゃ、試召戦争の時にこっちが困るぜ？」

坂本くんが私に尋ねる。

「…大丈夫だよ。

追試を受けない代わりに、一足早く補充試験を受けたから…。

その時の手応えもバッチリだったから、かなりの点数取れてと思うよ。

今日の放課後に結果を受け取るんだけど…よかったら一緒に来る？
代表なら、クラスの戦力を正確に把握しておく必要があるだろうしね」

「…格好良く言っただつもりだろうが、ここの設備じゃキマってないぜ？」

あう、やっぱり意地悪…

「ま、それも一理あるか…済まねえがついていかせてもらおう」

放課後、学園長室。

「…失礼します。」

2年Fクラス、フェイト・ハラオウンです」

一礼して入室する。

「来たね…おや？」

代表の坂本も一緒かい」

文月学園高等部のトップ、藤堂カヲル学園長。

東京の某私立中学テニス部顧問に似てると、学園内でもっぱらの噂。ちなみに、私達Fクラスの担任をしている福原先生は部員のひとりに似てるとかそうでないとか。

「まあな…クラス代表ともなりやクラスメイトの力を正確に把握しておかなきゃ色々と不利だからな。」

彼女に頼み込んで、付いて来させてもらった」

私をたてるように、わざと大仰な言い方をする。

「…まあいいさね。」

正直言つて、ハラオウンは無理にでも追試受けさせるべきだったと思うよ。

生徒のくせに僅か60分でこれだけの点数を、簡単に叩き出すんだからねえ」

呆れた顔で、一通の封筒を取り出す学園長。

私はそれを受け取り、中を確認する。

横から覗き込む坂本くんに見えるように、入っていた紙を開く。

「…げっ！！」

マジかこの点数…バケモンかよお前！？

確かに、100点の上限がなきゃ驚異だな…」

坂本くんが、驚愕の表情を見せる。

翌日。

今日は私達Fクラスの記念すべき緒戦の日だ。
しかし…。

「予定してたプランを変更する。」

…ハラオウンが戦力として計上しにくい以上、彼女を除いた49人で戦っていくしかない。

もつと重要な局面で動いてもらいたいし、俺達の手を極力他のクラスに見せたくないからな」

「雄二、どういう事さ？」

ハラオウンさんを極力参加させたくないって…。

まさか成績あまり良くないとか？」

「落ち着け明久^{バカ}」

「雄二にだけは言われたくないからね！？」

「その逆だ…力ありすぎて迂闊に使えねえんだよ。」

Bクラス戦までは実質待機してもらう形になるな。

そこで、対Dクラス戦だが……」

吉井くんの抗議を無視してDクラス戦に勝利する為の『作戦』を、皆に説明する坂本くん。

『…総員、Fクラス代表・坂本の首を狙え！
相手はザコばかりだ…数で圧して、補習室送りにしてやれ！』

Dクラスの攻撃部隊を指揮している男子生徒が突撃の指示を出す。
対する私達のFクラスは、40人近くを防衛に回して時間を稼いでいた。

ちなみに吉井くん達男子と美波は防衛組。

私と瑞希はどこにいたかと言うと…

「…やっぱり、この状態は恥ずかしいですよ…」

瑞希には辛いかも知れないけど…クラスの勝利のため頑張って貰いたいから私が一緒にいて彼女を励ましているのだ。

「あと少し…あと5分だけ頑張つて。

人が多くなれば、それだけ有利になるから」

「でも、ここまでする必要あつたんですか…？」

新校舎側一階女子トイレ、一番奥の個室。

ここに、作戦開始時間まで二人で籠っているのだ。
だがそれもあと数分。

まず私が便座に腰掛けて、瑞希が私の膝の上に座っている。

「…こんな状態で長い時間いたら、決して目覚めちゃいけない感情に…目覚めてしまいそうです…」

甘ったるい声で、とんでもない事を言う瑞希。
え、ちよつと!?

私は「そっち」の気は全く無いからね!?

…今のところは…。

そうこうしている間に作戦開始時間となった。

「…よし、時間だ。」

じゃあ瑞希、行こうか」

「え!?

あ、は…はいっ!!

誰もいない事を確認して、普通にトイレを出る。

念のため携帯で坂本くんに状況を確認する。

「…代表、状況は?」

『今奴らの後方に向こうの代表の平賀がいる…余裕のつもりなのか、
守りひとり置いてねえ。』

こちらの思惑に、まんまと引っ掛かってくれたが正直こっちも厳し
いな…』

「…了解。」

すぐ瑞希を向かわせるから何とか耐えきって」

『ああ、言われずとも』

早く救援に向かいたいが、その前にやらねばならない事がある。
それは…

「…先生っ、2年Fクラスです!

すみませんが、一緒に来て下さい！」

3階、Fクラス前。

召喚獣対決により疲弊し、あるいは0点となった者が補充試験に向かうか補習に連行されていく。

現在の彼我戦力差は17対24…基本的な点数の差を考慮すれば、かなり不利な状況と言える。

先程「停戦」の名を借りた降伏勧告を坂本くんが一蹴したばかり。

「やれやれ、君なら冷静な判断が下せるかなと思っていたのだが…所詮Fクラスだったという事か。なら、一気に決めよう」

そう言つてDクラスの攻撃要員に号令をかけようとした…その時、彼の肩を叩く手が。

「ん…君は確か、姫路瑞希さん？
どうしたんだい、Aクラスはこちら側を通らないはずだけど？」

瑞希は屈託のない笑顔。
これから始まる彼にとって予想外の事態を考えたら、少々気の毒かも。

「えつとですね…」

Fクラス・姫路瑞希！

試召戦争のルールに則つてDクラス代表に数学勝負を申し込みます

「！」

「え！？」

瑞希の言葉に驚くDクラス代表の平賀くん。

「サモン試獣召喚！！」

瑞希の「召喚」で召喚獣が出現する。

白い鎧に身を包んだ聖騎士が、パラディン戦乙女ヴァルキリーといったところか。

数学

Fクラス

姫路瑞希

426点

Dクラス

平賀修一

143点

……。

勝負はまさに一瞬。

瑞希の召喚獣が、身の丈を超える巨大な剣を構えたと思った次の瞬間平賀くんの召喚獣を両断していた。

「よし、今回のFクラスとDクラスの対決は現時刻をもって……Fクラスの勝利とする！」

今の対戦に立ち会った数学担当のヴィータが高らかに宣言する。
彼女も、昔から付き合いのある八神家4姉妹のひとりなので校外では下の名前で呼んでいる。

大人なのに背丈が低すぎるのが悩みらしい。
昔アルフがふざけて彼女を「チビ人間」って呼んだら凄い勢いで怒ってたっけ…それ以来は言わなくなったけど。

戦後交渉。

こちらがクラス設備交換を行わないかわりに、要求をひとつ吞ませた。

「…そんな条件で、いいのかい？」

「ああ、構わねえよ。」

次に対する布石のひとつだからな」

次の戦いの前に、実はもうひとつ必要な交渉があるんだけど…それは次で。

開戦（後書き）

基本的に一話完結型を目指しているため、十分な尺が取れません。

次回はいいよ、なのはが参加するBクラス戦です。

早くもフェイトと「本気の勝負」が実現するのか！？

フェイト達は根本の罠を、如何にしてかわすのか！？

謀略（前書き）

Bクラス戦。

なのはとフェイトの召喚獣お披露目です。
姿？

ある意味お約束ですよ。

謀略

…おかしい。

瑞希が、戦闘参加を異常に躊躇している。

体調が悪い訳でもないのに何かあったのだろうか？

昨日夕方、私は久し振りになのはの家へ行った。

「あ、フェイトちゃん！

いらっしやい…なのはなら部屋にいるはずよ」

なのはのお母さんと、海鳴駅前にある喫茶店・翠屋のパティシエールでもある、高町桃子さん。

相変わらず、信じられないくらいに若々しい。

なのはには少し歳の離れたお兄さんとお姉さんがいるから、その親の桃子さんも結構な歳になるはずだけど…。

「おっ、久しぶりだね。

フェイトちゃん…また今度来た時にでも、軽く稽古に付き合って欲しいねえ」

今のはなのはのお父さん、高町士郎さん。

今でこそ気のいいお父さんだけど、昔は映画なんかのエージェントみたいな事もしてたんだって…。

高町家には「小太刀二刀・御神流」の道場もあって、士郎さんはそ

この主。

私も、二刀の稽古をたまにさせてもらっている。

なのはの部屋。

学習机は小学生からずっと使っているらしい。

高校生になった今だと少々きつそうなサイズかも？

「今日はまた何で…って、やっぱり『あれ』のコト…だよね？」

「…うん。」

次はなのは達のBクラスに決まったよ。

それで、以前頼んだ事は…引き受けてくれるの？」

腕を組んで唸るのは。

「結論から言えば、協力はできるよ。」

ただBクラスの代表はあの根本君だから、途中で看破されるかもしれない。

そのリスクを覚悟するなら私も肚をくくるよ。

後は…Fクラスが提示する見返り次第かな」

「その辺りは任せて。」

代表がクラス設備の交換を行わないと確約してくれたから…」

なのはの表情が曇る。

「ん…それだけじゃ不満かな、もっとやる気が出る報酬がいいなあ」

仕方が無い、なのはを納得させる切り札を使うか。

私が『個人的に』用意した報酬によりなのはを落とす事に成功したのだった。

現在の状況は、Fクラスの大半のメンバーで相手方：Bクラスの出
入口を塞いでいる状態。

代表の根本恭二くんは勿論なのはも中にいる。

攻撃部隊には瑞希もいて、私はその後詰めと万一突破された時の防
衛要員として本拠前で待機している。

「…やっぱり瑞希の様子が変だ。

戦う意思はあるのに何故かたじろいだ後攻撃をやめてしまう…」

…瑞希の様子に嫌な予感を覚えた私は、補充を終えて戦列へと復帰
したばかりの『彼』に相談するべく合流した。

「吉井くん、ちょっといいかな…？」

「どうしたの、ハラオウンさん？」

「…瑞希の様子がちょっとおかしく見えるんだけど、吉井くんはど
う？」

言われて瑞希の方を改めてよく見てみる吉井くん。

「…確かに少し変だね。

戦おうとしてはいるけど…何かに怯えたように攻撃をやめちゃって
る…」

私は吉井くんに尋ねる。

「何が原因か、確かめる事できそう？」

「…うーん、ここからじゃちょっと分かりにくいけどBクラスの中に理由があるように見えるね」

「…やっぱりそう思う？」

それじゃ、少し耳を貸してくれる？

状況を打破する為の秘策、教えてあげるから」

私は吉井くんに、耳打ちで『秘策』を教える。

「決して主役ではないかもしれないけど、この作戦は吉井くんがいないと絶対にできないの。」

瑞希のために、漢を見せる覚悟はある？

答えは『原因』を確認してからでもいいけど…」

「僕にしかできないなら、どのみち僕がやるしかないじゃないか。」

一応、確認だけはしてくるけど…」

そう言つてBクラスの前に行った吉井くんはすぐさまこちらに戻つてきて、私と坂本くんに言い放つた。

「やるよ…いや、やらせて欲しい！」

これ以上、根本君の好きにさせてたまるもんか！！」

吉井くんの瞳に、どこかの野球漫画みたいな紅い炎が見えた気がした。

「…なら、私もバリケード部隊の応援に回るよ。
代表…構わないかな？」

「ああ、頼むぜ」

本拠に最低限の戦力を残し『作戦』のために移動する吉井くんと私。

吉井くんは一旦Cクラスに行き、私は…。

「まだ点数が多く残ってる人は2〜3人私について、ここを死守！
残りは補充を受けながら、前側の増援に！」

『イエス、サー！！』

…え？

その軍队的なノリは何？

しかも『サー』って、私は一応女なんだけどな…。

私の姿を認めて、なのはが動いた。

今、私がいる後方出入口の召喚フィールドは…基本の点数が最も低い科目である古文。

しかもこの短時間で同時に5人も相手にしたため相当点数を削られた。

古文が一番苦手なのはが相手でも、苦戦は必至。

「フェイトちゃん、ごめんね…私達も、負ける訳にはいかないから」

…あの目は本気だ。

応じるしかないのか…。

『サモン
試獣召喚！！』

合図によって出現する私となのはの召喚獣。

なのは白と青をベースにした、ドレス風クロークを着た魔導師スタイル。

一方の私は…水着のような形状の黒いワンピースと、表が黒で裏が赤のマントを羽織った剣士風。

互いの点数が、空中に表示される。

古文

Bクラス

高町なのは

145点

Fクラス

フェイト・ハラウン

142点

…さすがBクラス次席。

最も苦手とする科目かつ、私の方かなり疲弊してるとはいえ…なかなか高い点数。

私達が、Dクラスと戦っている間くらいに補充試験を受けていたのだろうか？

「行くよフェイトちゃん、この学園に入って最初の…『本気の勝負』…！」

「…受けて立つッ！！
私だって、負けない！！」

一方、Cクラス。

Bクラスと壁で接するこのクラスで吉井くと美波が『対決』していた。

しかし、吉井くんは美波に一切攻撃せず召喚獣に壁を殴らせ続けている。

吉井くんは『観察処分者』という不名誉な称号を与えられているが、メリットも多少はある。

それは通常の召喚獣と違い『物に触れる』事。
だからこうして『作戦』のため、一心不乱に壁を殴り続けているのだ。

普段は先生達の雑用などをさせられている彼だけど…その分だけ召喚獣の扱いに慣れているのも、数少ないメリットのひとつ。

それ故か回避能力が異常に高く『神速』をウリにしている私ですら彼の召喚獣に攻撃を当てるのは、かなり難しい。

彼の奇行に、立会人である世界史の先生やCクラスの生徒達は首を傾げていたのだった。

さすがに不審に感じた先生がフィールドをキャンセルしようとする。

「（チャンスはあと一撃…これで決めなければすべて終わりだ！
全身全霊をもって壁に拳をぶつけるんだ！）」

拳が早いか、キャンセルが早いか。
まさにタッチの差が明暗を分ける。

「だあらつしやああ!!」

吉井くんの召喚獣が放った渾身の一撃が、防音仕様の分厚い壁を突き破り大穴を開けた。

時を同じくして、なのはと私の対戦も決着した。
結果は…。

古文

Bクラス

高町なのは

9点

Fクラス

フェイト・ハラオウン

0点

……負けた…。

あの点差だから勝てるかもしれないと思ったんだけど甘くはなかったか…。

私と一緒にいたFクラスの男子が、すかさずなのはに古文で勝負を挑む。

まあ、さすがにこれは勝利したけど…。

その時突然怯えるなのはの視線の先…私の後ろから、野太い声が聞こえた。

「高町にハラオウンよ。」

お前達は本当に、仲がいいようだな？

それはさておいて…解っているな？」

『い、嫌…！』

鉄拳補習だけは嫌あ！！』

鉄人…もとい、西村先生の声に怯える私となのは。

実は、はやてを含めた私達3人も一度だけ西村先生の補習…通称『鉄拳補習』を受けた事がある。

興味本意で希望参加したのだが…その選択が間違っていた事を痛感した。

あの空気は何度経験しても絶対慣れそうにない。

私達は絶対あの鉄拳補習を受ける事にならないようにしようと、あの時固く心に誓いあったのだが…まさか試召戦争絡みで受ける事になるうとは。

「ははは、そう怯えるな…優秀なお前達なら、すぐに終わるだろう？」

私達の、利き腕側の手首を掴み補習室へ連行していく鉄人…いや、西村先生。

その後、吉井くんが注意を引き付けている間屋上からロープを使ってシグナムと共に土屋くんが奇襲。

シグナムは土屋くんの得意科目の保健体育と、体育の担当。

もし西村先生もシグナムもダメなら、この作戦は失敗するという綱渡りだったんだけど…どうやら、うまくいったみたいだ。

土屋さんの保健体育は何と476点…Aクラス並。
207点の根本くんが敵う相手ではなく、まさに瞬殺だったの事らしい。

戦後処理で私達Fクラスは再び設備交換を放棄。

代わりに根本くんに対する制裁をこちらに任せて貰う事にした。
その制裁内容は『女装した上で証拠写真を撮り、かつその格好でAクラスに準備があると宣言する』。

うーん…これは相当精神的苦痛がキツイ気がする。

彼の悪評を考えれば、自業自得と言えなくはないけど少々気の毒かな。

…そうそう、私がないのはに頼んでいたのは『バレないように私との戦いで手加減しつつ、僅差で勝利した後
Fクラスの誰かに倒されて根本の警戒心を誘うこと』でした。

警戒心を煽れば近衛部隊を集めさせる事と攻撃の手を緩めさせる事ができる…と私達は踏んだのだ。

さらに吉井さんの壁抜きで注意をそちらに向けさせておいて屋上から土屋くんが奇襲し根本くんを倒す。

予め窓を全開にさせるためDクラスに空調の室外機を弄って、不調にして貰っていたのだ。

おまけに今日は晴れ、気温27 ・湿度は69%。

4月だとは思えない陽気で空調なしではいられない程蒸し暑い。
全てがFクラス側に有利になっていたのだ。

裏を返せば…ここまで手を尽くさなければ、勝つのが難しいともいえる。

戦い終わって、夕暮れ時のFクラス。

補習から解放され、戻ってくると誰かが私のバッグを開けて何か入れているのを目撃した。

あれは…瑞希？

バッグを閉めたのを確認したった今戻ってきた振りをする。

「きゃっ…！！」

あっ、フェイトちゃん！？

み…見ましたか！？」

「えっ…何を？」

「もしかして…見てないんですか？」

「だから、何を？」

「…あ、だったら…何でもないんです！」

早足で去っていく瑞希。

私は入れられた物が手紙である事を確認して、帰路についた。

手紙には、Bクラス戦にて吉井くんを励ました事などに対する感謝の文が目一杯綴られていた。

手紙の最後にはこんな事も書かれていた。

『フェイトちゃんが男の子だったらきつと…うっん、絶対に好きになつていたと思います。』

そのくらい、私にとっての貴女はカッコ良くて素敵な女性ひとです』

うっん…。

何だろう、この微妙すぎる感情は。

次は、とうとうAクラス戦だというのに。

謀略（後書き）

瑞希×フェイト百合フラグ発生…？

このまま突っ走ってもいいですか？

相変わらず方向性が不明の駄文です。

次はいよいよはやて参戦のAクラス戦です。

血戦（前書き）

Aクラス戦です。

さて…どうなる事やら？

血戦

Bクラス戦から数日後。

私はクラスの使者として、Aクラスにいた。

少し前、Fクラス。

対・Aクラス戦に向けて、ブリーフィングが行われていた。

「……いいか、普通のやり方じゃAクラスには絶対勝つ事はできねえ。だから一対一の勝負にする必要がある」

クラス代表の坂本くんが、具体的な戦略を話す。

「一対一の勝負って、誰と誰が戦うのさ？」

吉井くんの質問。

「当然、俺と翔子だ」

確かに、代表同士での対戦なら自然な流れだろう。

……問題は、向こうが素直に受けるとは思えない事。

そして『召喚獣対決では、坂本くんに勝ち目がない』という事だ。

「だが『試験召喚戦争』のルールじゃどう足掻いても翔子には敵わねえ。

そこで向こうに俺達の出す条件をひとつ吞ませる。

格下の俺達相手に、ごねるなんて向こうにとっちゃあ恥だからな…
絶対に乗ってくるはずだ」

今度は私が尋ねる。

「その『条件』って?」

「…悪いが、対戦するまで秘密だ。
どこから漏れるか解らねえからな」

「…なるほどね、そっちの要望はわかったわ。
だけどね…」

秀吉くんの双子のお姉さんである木下優子。

何となく某神社神主一家の三女に見えてしまうのは、私の気のせい
だろうか?

「…受けてもいい」

今のはAクラス代表の霧島翔子。

坂本くんとは幼馴染みで、多少思い込みが激しい…と聞いている。

「だ、代表!?!」

「但し、こちらにも条件がある。

…はやて、お願い」

「ほいほい」

Aクラス次席で、なのはや私の親友・八神はやて。

茶色がかった銀髪が特徴の日独ハーフ。

「一対一の勝負にするんはええんやけど、折角やから剣道とかみたいな団体戦にせえへん？」

せやな… 5対5あたりどうやろ。

大将戦はそっちの希望通り坂本君と翔子がやるとしてあとは自由。ほんで、先鋒戦・中堅戦・大将戦の教科選択の権利はそっちにあげるわ。

こんな感じでどうや？」

「…それは、みんなと相談しないと」

「…構わない。

意見がまとまったら、もう一度来て」

今のはもちろん翔子。

「…じゃあ、相談してからまた来るね」

Fクラスへと戻った私は、Aクラスの要求を坂本くん達に伝えた。

結局双方の要求を反映した形で試召戦争となったのだった。

その日の13時、新校舎側一階の視聴覚教室。

「…これより、Fクラス対Aクラスによる変則ルールを用いての試験召喚戦争を開始します」

Aクラス担任で学年主任の高橋洋子先生。

…言いたい事はわかるけど多分無関係だと思うよ。

私はそう信じたい。

…あ、ちなみに『奇跡』は起こるものじゃなく起こすもの…間違えないでね。

「ルールを確認します。」

剣道や柔道と同じ一対一の団体戦で3勝した方の勝利となります。

先鋒戦・中堅戦・大将戦の教科の選択権はFクラスに与えられますが、総合科目以外で一度使用した教科の再使用はできません。
よろしいですね？」

坂本ちゃんと翔子が頷く。

「では先鋒戦を開始しますので、先鋒の人は前へ」

「頼むよムツツリーニ！」

「……任せろ」

檄を送る吉井くんと、普段通りに返す土屋くん。

「頼んだわよ、愛子！」

「おっけ〜」

同じように檄を送る優子とマイペースな返事を返したAクラス先鋒の少女、工藤愛子。

「土屋君、教科は何を選択しますか？」

「……保健体育」

150インチを超える特大プラズマディスプレイに、点数が映し出される。

保健体育

Aクラス

工藤愛子

501点

Fクラス

ムツリーニ

土屋康太

453点

『何いつ！？』

意外な愛子の点数に、私達Fクラスは勿論ギャラリーとして来ていた他クラスの人も驚きを隠せない。

「ふふん…どうかなムツリーニ君？」

保健体育の成績がいいのは君だけじゃないんだよ」

点数で勝るせいか、余裕の笑みを見せている愛子。

「くそっ…！」

さすがはAクラス、簡単に勝たせてはくれねえか。

保体でムツリーニ以上の奴までいやがるとは…」

歯噛みする坂本くん。

その一方で…。

「…な、先鋒に愛子を配置して正解やったやろ？」

何が何でも一勝を奪いたいのはどうちも一緒や。

愛子でも正直なところ不安はあったけど、あれなら惨敗する事はないやろな」

なるほど…はやてが考えた作戦だったのか。

こちらのオーダーを考えた私の考えはお見通し…って訳ね。

その頃壇上では、ある意味血の雨が降る程熱い戦いが繰り広げられていた。

「ほらほら、感情に素直になっちゃいなよ？」

「…ぐっ…そんなものには負けない…！！」

愛子が「見えそう」な仕草で土屋くんを誘惑する。

うーん、さすがは「ムッツリー二」と呼ばれる男。

あんな状態でもまだ平静を保とうと頑張れるなんて、ある意味感動ものだな。

…嫌な感動だけ。

しかし非情にも点数表示は0となり、土屋くんは敗北した。

「…えー、先鋒戦はご覧の通りAクラスの勝利です…続いて次峰戦に入りたいと思います…が」

呆れながらも進行を続ける高橋先生。

「土屋君の血の掃除のため30分中断します」

ティッシュで何とか鼻血を止め、土屋くんがこちらに戻ってきた。

「……面目ない」

「大丈夫、私が読み違えたせいだから土屋くんは悪くないよ」

「……ああ、相手が悪すぎただけだ。
気にする事はねえよ」

落ち込む土屋くんを、私と坂本くんで慰める。

「じゃが……大丈夫か？」

「ムツツリー二が負けたとなるとかなり厳しい状況になるのではないか？」

秀吉くんの心配をよそに、次峰戦の準備が着々と進められていく。

「大丈夫……」。

中堅の瑞希が負けなければ大将戦に持ち込む自信は、十分にあるから」

そう……副将戦は私。

そして相手は多分……」。

血戦（後書き）

全部書ききるには、どの道一本では無理でした。

次回はAクラス戦の次峰戦からです。

超人（前書き）

Aクラス戦その2です。

超人

壇上の清掃が終わり、対戦の準備が整った。
次峰戦は吉井くん。

「じゃ、いつてくるよ」

「頑張ってください!!」

瑞希に応援されだらしなく破顔する吉井くん。
何て分かりやすいの…。

対するAクラスの次峰は…学年暫定3位の、久保利光くん。
以前「好意を寄せている」と、坂本くんが吉井くんに冗談か真実か
不明の情報を教えていたその相手。

「やあ、吉井君。

やっと対面できたね…君の実力、計らせて貰うよ」

「それでは久保君、教科を選択して下さい」

「…では、日本史をお願いします」

「アキ、大丈夫なの!？」

美波が心配そうに吉井くんに尋ねる。

「…大丈夫だよ島田さん、みんな。
こう見えて僕、実は…」

自信ありげの吉井くん。

「…左利きなんだ」

『……………』

室内の空気が凍る。

日本史

Aクラス

久保利光

455点

Fクラス

吉井明久

74点

案の定瞬殺される吉井くんの召喚獣。

「このバカ!!」

筆記試験に、利き腕は関係ないじゃないの!!」

「あがあっ!?!」

し、島田さん痛いっ!!」

「あ、あの…こういう時はどしたらいいんでしょうか…?」

おろおろする瑞希。

「鼻で嘲ってあげるの。」

…こんな風に、ね」

さすがに私も呆れて、罵倒したくなってきた。

「…吉井くん？」

本当にがっかりだよ。

ああいう状況であんな事を言うなんて…一体どういう思考回路してるの？」

私はあまり人を貶さない方だけど、今回はさすがに…ね？

「…ハラオウンさん！？

ヒドイよ、君だけは味方でいてくれると思っていたのに！！」

「…限度があるよ。

それに、次峰戦は勝てたらもうけもの…くらいにしか思ってたなかったしね」

自己嫌悪するくらい普段と真逆の態度をとる私。

中堅戦、瑞希の定番。

相手は…。

「…あんたが相手とは正直予想外だわ…でも、全力で行かせて貰うわよ！！」

…優子だった。

「それでは姫路さん、どの科目を選択しますか？」

「えっと…英語を」

英語

Aクラス

木下優子

327点

Fクラス

姫路瑞希

479点

…これなら、余程のヘマをしない限り大丈夫だね。

「くっ…!!」

私の弱点をピンポイントで突いてくるなんて…!!」

一瞬とはいかなかったが、それでも割と短時間で決着がついた。

勝つためにはもう、一本も落とせない私達。

ようやく一本を返した事になる。

さて、次は副将戦。

いよいよ私の出番だ。

15分間の休憩を挟んで、いよいよ副将戦。

「…そういや、こんな風に闘うんは初めてやな。

幼馴染みやからって手加減せえへんよ?」

「それは、私の台詞だよ…はやて。

『全力全開』で、いかせてもらっからね…!」

「…上等やがな!

恨みっこなしの、真剣勝負でやるで…!」^{ガチ}

「それでは八神さん、どの科目を選択しますか?」

「…化学・物理で!」

二人とも得意な科目だが、はやては知らない。
…この科目における、私の成績を。

化学・物理

Aクラス

八神はやて

486点

Fクラス

フェイト・ハラオウン

1207点

『ぶはっ!!!!???』

会場の視聴覚室にいるほぼ全員が一斉に吹き出す。

「ちょ、待てえ!!」

1000点オーバーで一体どういう事や!?

「…まだ解らないの?

これが、本来の私の『全力全開』なんだよ」

「はゝ、なるほど。
んじゃ仕方ないなあゝ…って！
納得できるかあー！！！」

勢い余って某・借金執事の主の、従姉みだいになっているはやて。
よく見れば風貌も結構似ている。

「私は『瞬間記憶能力者』っていうクチでね…。
覚えようと強く意識しつつ見た物はほとんど瞬間的に脳が記憶して
しまうの。

しかも記憶はかなり自由に引き出せて、さらに長期間忘れる事がな
いんだ…」

そして、はやての召喚獣は私の召喚獣にあえなくKOされてしまう。
パツと見無傷な分だけまだマシというもの。

「うう…何でや。

あないな大量な点数、反則やないか…」

哀れはやて、喧嘩を売って返り討ちの大失態。

私が戻ると、すでに点数を知っていた坂本くんを除く全員が震えて
いた。

「ふえ、フェイトちゃん…他にもあんなに点数が高い科目があるん
ですか？」

瑞希は怯えきってしまったている。

…うーん、鼓舞するつもりだったのに逆効果だったのかな…？

それはさておき、いよいよ大将戦：坂本さんと翔子の対戦。

私と瑞希が勝って、何とかイーブンに戻せたんだ。
ここまで来たら坂本さんに絶対勝って貰いたい。

超人（後書き）

フェイトが、超人の片鱗を見せつけましたね。

次はいよいよ原作第一章の最後、対Aクラスの団体戦大将戦です。

果たして雄二は翔子という壁にどう対抗するのか。

Aクラス用の設備は奪えるのか。

次回「記憶」（仮題）。

リリカルマジカル、頑張ります！

（田村ゆかり風に）

記憶（前書き）

対Aクラス、完結です。

記憶

大将戦。

「それでは坂本くん、どの教科を…」

「おっと、それに関しちゃこっちから要求させて貰うぜ…科目は日本史。」

問題のレベルは私立中学の入試程度で100点の上限ありだ」

高橋先生が困惑する。

「それは霧島さんに聞いてみないことには…」

「…私は構わない。」

どんな状態でも常に全力で挑むだけだから。

でも、私も条件がある。

この対決に限り負けた方は勝った方の言う事を何でもひとつ聞く事。ただし要求するのは常識に則ったものである事」

翔子は、毅然とした態度を崩さない。

「ち…わーったよ。」

その条件でいいぜ」

「では、問題を作成しますので一時間休憩です」

「あんな条件出して本当に勝てるの…?」

…私は不安になって、坂本くんに自信を聞く。

「大丈夫だ…他の教科じゃ敵わねえが、日本史…特に中学入試程度なら、十分に勝機がある」

「どうしてそう言い切れるのさ？」

今度は吉井くん。

「小学生の時、ある年号をあいつに間違って教えてたんだよ。

あいつは、一度覚えた事は勉強であろうと自分で正す事はしねえ。だから、その問題が出ればあいつは絶対間違える」

「…ちなみにその年号って何があつたの？」

「…大化の改新だ。

あいつは『無事故で起きた大化の改新』で覚えたから625年と書くはずだ」

「…えげつないね。

大化の改新は『大化の改新虫5匹』で645年だったはずだよね？」

「そうだ、後はその問題が出りゃあ…」

一時間後。

向かい合って用意された、標準タイプの机。

二人がそれぞれ椅子に座り問題用紙と解答用紙が配布される。

「制限時間は60分、不正行為が認められた場合その時点で失格負けです。」

「よろしいですね？」

…ちなみに私達も見ているだけでは退屈なので、同じテストをやる。

「皆さんも準備はいいですか？
では、10秒前」

カウントダウン開始。

「3……2……1……。」

始め！」

坂本ちゃんと翔子、更に私達も参加する日本史テストが始まった。

ここで私達が受けた日本史テストの問題を抜粋。

問

次の（ア）～（オ）の中に適切な単語を入れて、文を完成させよ。

●我が国において（ア）が始まったのは（イ）の頃とされている。
それまでは（ウ）によって得た（エ）や（オ）などが主食と言われている。

問

（ ）の中に数字を入れて、次の出来事が起こった年を答えよ。

（ ）年・大化の改新

- 年・平安京遷都
- 年・鎌倉幕府開府
- 年・江戸幕府開府
- 年・太平洋戦争開戦

問

次の語群は廃藩置県以前の国名である。

それぞれ現在の都道府県に照らし合わせると、どこにあたるか答えよ。

なお複数にまたがる場合はひとつでよい。

- ・阿波
- ・武蔵
- ・遠江
- ・越後
- ・薩摩

…中学入試の問題だから、そんなに難しくもないな。
それと…出てる。

『例の問題』がね。

この程度ならちゃんと勉強していれば満点も難しくはないはずだ。

60分後。

「…そこまで!!」

筆記具を置いて解答用紙を伏せて下さい!」

ペンを机に置き解答用紙を伏せる。

そして数十分後…。

高橋先生が採点を終えて、まず私達の点数をモニターに出す。

やはり、中学入試レベルとあってみんな50点は獲得できている。

吉井くんですら、52点とまあまあの出来だ。

私と瑞希、Aクラスの皆は軒並み90点以上。

さて、気になるのは2人の得点だ。

モニターが暗転し、決着の時が来た。

日本史(特別ルール)

Aクラス

霧島翔子

96点

Fクラス

坂本雄二

61点

……………え?

96対61?

私よりも、誰よりも素早く吉井くんが詰め寄る。

「雄二!

どういう事なのさ!?!」

「…私も知りたいな。」

ケアレスミス…って訳でも無さそうだけど？」

「ああ…済まねえ、あれが俺の今の全力だ」

坂本くんは『面目無い』と言いたそうな表情で私達に釈明した。

「じゃ、何でこんな条件の対決をしたの？」

こんな事になるならいつそ吉井くん・美波・土屋くん・瑞希・私の順で戦う方が何倍も良かったよ！」

私は久し振りに怒りを爆発させた。

「返す言葉もねえ…。」

全て俺の責任だ」

「良く言った…！」

歯あ食い縛れ、そんな奴あ修正してやるっ…！」

「よすのじゃ明久…！」

気持ちは解るが早まってはならん…！」

「そうですよ明久君！

暴力はダメです…！」

坂本くんに殴りかかろうとする吉井くんと、止めようとする秀吉くんに瑞希。

そんな騒がしい私達のもとに翔子がやって来た。

「小学生レベルの問題と侮った雄二の油断」

「へーへー、んで…何を言うつもりだ？」

…ん？

心なしか、翔子の頬が赤いような？

「雄二、私と付き合って…あの時の約束のために」

「お前、まだ覚えて…」

意外な『要求』に、驚きを隠せない坂本くん。

「私の初恋は雄二だから…私はまだ諦めていない」

…何、この桃色空間？

羨ましくなんかないよ。

本当だよ？

対決を終えた私達のもとにシグナムがやって来た。

「…残念だったな。

だが、私も含めて先生達はお前達Fクラスがここまでやるとは思わなかった。

その頑張りに敬意を表して来週から福原先生に代わり私がお前達の担任を務める事が決まった」

「……え？」

「設備はまあどうしようもないが、これから3か月間そんな事気にならなくなるくらいにお前達をみっちり鍛えてやる。

特に吉井と坂本、お前らは特に厳しくしてくれと西村先生に言われている…覚悟しておくんだな」

「シグナム…先生、設備は何になるんですか？」

恐る恐る尋ねる私。

「…聞きたいか？」

みかん箱とゴザだ…。

…みかん箱が木製なのが、せめてもの情けだな」

試召戦争に敗れてしまったため、これから最低3か月みかん箱とゴザで勉強する事となった。

…せめて、座布団は欲しいよ…。

こうして、私達Fクラスの最初の戦いは終わった。

しかし、これからも様々な大騒動に巻き込まれてゆく事になる。

私の…私達の、短くて長い一年はまだ始まったばかりなのだ。

第1部「開幕戦編」

（完）

記憶（後書き）

翔子の婚姻届の話は、面倒なのでカットしました。
でもどっかで使うかも？

新担任はむさい鉄人よりも美人のシグナムの方が明久達も嬉しいでしょう。

…多分。

次からは清涼祭などやっていこうかなと、一応考えております。

学宴（前書き）

清涼祭突入。

まずは準備編です。

学宴

あの試召戦争から1ヶ月…私達Fクラスはみかん箱とゴザという屈辱的な環境に耐えながらも勉学に励んでいた。

「えー、来るべき清涼祭で私達Fクラスがやる出し物を決めるための話し合いを行いたいと思います。
が、その前に…」

あの日以来、クラス内での坂本くんの評価はガタ落ちした…まあ、あれじゃ仕方ないよね。

代表は1年間変えられないルールなので、坂本くんのままだが『坂本降ろし』の気配が生まれたのは確かである。

そして今は私が他校でいうクラス委員長のような役をしているのだ。

窓際に移動しグラウンドを見る。

吉井く…もう面倒だから、名前で呼ぶかな。

明久と雄二が鉄じ…いや、西村先生に追いかけている…あ、捕まった。

西村先生に引っ張られて、二人が戻ってきた。

「全くお前は…」

お前らがそんなだから、ハラオウンが迷惑してるんだぞ？

彼女の苦勞を、少し考えてやったらどうなんだ」

シグナムと西村先生、体育教師2人の小言は結構辛いものがあるだろう。

「…では改めて、清涼祭の出し物を決めましょう。何か意見ありますか？」

わかってた事だけど、誰も手を挙げようとしな

と、雄二が手を挙げた。

「学園祭じゃ喫茶店とかは定番だが、ただのサ店じゃインパクトに欠ける。

そこで店員の服装に凝ってみるってのはどうだ？
実際にメイド喫茶とかあるだろう？」

…確かに一理ある。

Fクラスは男子が圧倒的に多いとはいえ、私に瑞希に美波もいる。少し工夫すれば客足も期待できるだろう。

それに学園長とうまく交渉できれば、助っ人を入れる事だってできるかも…。

…様々な意見交換の結果、Fクラスではこの出し物に決まった。

「点心・飲茶・軽食

中華喫茶『好』」

ちなみに、好は「ハオ」と読む。

「ヨーロッパ」なんて案も出たが、中華喫茶だからさすがにそれはないと却下した。

「…ふむ、面白いさね。
好きにやればいいよ」

NGが出るかと思ったが、藤堂学園長はあっさりOKした。

「…それで、学園長。
ひとつお願いが…」

「何だい、言ってみな」

「学外から助っ人として、Fクラス所属生徒の家族を入れたいんです。」

「ウエイトレスが私含めて3人では足りません」

「それは一向に構わないが学校や会社を休ませてまで来させるのはダメだよ」

「…やっぱりね。」

まあ当然と言えば当然…といえる判断だ。

私は思い付く限りの名前を助っ人として申請した。

清涼祭の準備が着々と進みそれらしくなっていく。

…学園長との交渉の結果、次の条件で出店できる事になった。

- 出店する場所は、3階の空き教室。
- 設備は、極力Fクラスのものを使う事。

但し椅子はCクラスに準拠する。

- 必要ならば衣装の外注や助っ人なども可、発生した経費は学園が負担する。

ただし、助っ人に関しては事前に申請する事。

- 売り上げにより発生した利益は全額Fクラスのものとし、用途は自由。

万が一問題が発生しても、学園は一切関知しない。

清涼祭前日の放課後。

私は最終チェックのため、みんなに状況を聞く。

「ムッツ…じゃなくて。

土屋くん、衣装って…」

「…問題ない、既に全員分用意してある」

貸衣裳屋から調達した…と思いたい、様々なサイズや色の服が並んでいる。

既にお気づきだろう、全て似た形状だという事に。

そう…『チャイナドレス』と、一般的に呼ばれているものだ。

ウェイトレス役をする私達女子は、その衣装に着替え接客をする。当日は他にも助っ人が来てくれるため数着余分に用意されている。

…黒いやつが、私のために用意されたものらしい。

以前『落ち着いた色の方が好みかな』と言ったのを、覚えてくれて

いたのか。

確かに、色は落ち着いてるけど…この場合、少し派手だと思う。

文月学園・高等部の学園祭『清涼祭』は、GWの後の土日に行われる。

もちろん他校と同じように各クラスや部の模擬店など多くの出し物や展示があるが…。

それ以上に、文月^{こい}ならではの目玉イベントが存在する。

それが『試験召喚大会』と呼ばれる、一種の対抗試合である。

参加は二人一組で、クラスから何組でも出場可能。

…同じクラス同士でないと出場できないが。

Fクラスからは明久・雄二ペアと私が出る。

…私と誰が組むのかで散々揉めて、結局クジで決める事に。

「…では、印のついている紙が当たりだ。

一人一枚ずつ引け」

一体どこから用意したのか丸い穴の開いた箱に47枚の紙を入れたシグナム。

一人ずつ引いていき一斉に確認する。

「…あ」

一角から声上がる。

当たりを引いたのは…。

「…皆、すまぬな。」

「どうやら、ワシが当たりのようじゃ。」

クラス全体から、がっかりした溜め息が漏れる。

『なんだ、木下かよ…』

『まあ、逆にいいか。』

『女同士ならまだマシだ』

…えーと、秀吉も一応男子なんだけど。
当人は、諦めたように苦笑するばかり。

「では、ハラオウンよ。」

試験召喚大会ではよろしく頼むぞい」

こうしてFクラスからは、明久・雄二ペアと私・秀吉ペアが出る事になった。

1日目の朝、私の家。

「じゃあ、行きましょ」

「…うん。」

「ごめんね…無理言つた上に事後承諾で」

「…あら。」

親が子供に協力するのに、理由なんて無いじゃない…あの子達もすぐ来るから、先に向かいましょ」

そう、母・リンディに協力して貰ったのだ。

私達Fクラスが、模擬店で出す飲茶の材料も手配してくれた。

母は女手一つで私達兄妹を育ててきたためか、超一流料理人並の腕を持つ。

主に厨房担当だが、余裕があればフロアにも出て貰うように頼んである。

「それにしても…。

最初Fクラスになったって聞いた時は驚いた。

でも理由を詳しく聞いて、実にあなたらしいと思ったわ…。

あなたは昔から、そういうところ頑固で意地っ張りで人の話聞かなくて…」

「あう…母さんまで意地悪言わないでよあ…」

からかう母に、涙目になる私。

学校に着き、Fクラス隣の空き教室へと向かう。

「あ、おは…って!?

フェイト、誰その人!?

美波が驚いて、私に聞いてくる。

他の級友達も、私と一緒に堂々としてきた母に驚きざわついている。

「…ああ、紹介するね。

この人は私の母リンディ・ハラウン。

今回、私達に色々協力してくれた人だよ。

協力者はあと2人いるんだけどね」

『…えええええっ!?!?』

私が母を紹介すると、教室全体が驚愕に揺れた。

『どう見たって20代前半だぜ…!?!?』

『あれで母親って…若すぎだろ!!!』

そこへ更に、母がトドメの一言。

「…信じられないのも解るけど、本当の事よ。
この子…フایتには5つ上の兄がいるわ。
もちろん私が自分のお腹を痛めて産んだ息子よ」

『ええー……っ!?!?』

空き教室がひととき大きく揺れる。

『…ええい、ハラオウンの女達は化け物か!?!?』

どこかで聞いた名ゼリフに似たような毒づきを誰かが言った。

「5つ上の兄がいる…って事は、21か22。

その母親だから、最低でも道徳的に見て40は越えてないとおかし
い…この若さでアラフォー過ぎてるってあり得ないわ…!!

それに胸も結構大きいし…一体どこまで恵まれた家系なのよ…!!」

美波の顔が青ざめる。

…まあ、その心境は分からなくもないけど。

「…取りあえず今日明日の間、娘達共々よろしくね」
フエイト

その後に義姉・エイミィと妹・アルフも来た。

「フエイトの兄・クロノの妻のエイミィです。
皆よろしくね！」

「…フエイトの妹のアルフだよ。
アタシは聖祥高校だけど、どうしてもって頼まれて…暇だったって
もあるけどね。
ま、皆よろしくな」

こちらの2人はいい意味で普通なので、驚かれる事はなかったが…
男子の注目を集めたのは確かだ。

学宴（後書き）

エイミィはカレルとリエラを後輩の家族に預けています。

次は清涼祭開始。

どこからいこうかな。

喫茶（前書き）

清涼祭の1日目です。

喫茶

「いらっしやいませ、中華喫茶・好によっこそ！」

清涼祭が開始され、学園の生徒や教師達が各クラスの模擬店などに足を運ぶ。

「おすすめですか？」

そうですね…胡麻団子などいかがですか？」

出だしは上々。

『綺麗所が多い』…と噂がたっているらしく、時間が経つにつれて客足が延びていった。

私と瑞希だけでも、相当のネームバリューがあるから不安はなかったけど。

更に、チャイナを来て接客してるなんて知ったら一度見たくなるのは心理として当然か。

「オーダー入ります！」

…飲茶セットと胡麻団子、3つずつです！」

『はい！！』

学園祭とはとても思えない盛況ぶり。

文月の高等部は生徒と教員全てあわせて1000人程だが、16席しかないのだから回転率をあげるのが勝負の分かれ目となる。

…って、こう言つと経営者みたいだね。

やはり母の血なのか…。

…え、母は何の仕事をしているんだって？

はあ…仕方ないな。

できるだけ秘密にしておきたかったけど。

実は、母は日本…いや世界でも有数の大企業グループ「アースラ・ホールディングス」の現会長。

私の両親は元々経営者で、それぞれ別の会社の社長をしていた。

でも私とアルフが生まれてすぐに父が亡くなり、その後2人の会社は統合。

そして母が新社長となってからは戦略が悉く当たり、たった5年で急成長。

今では国内外100を優に越える傘下企業と国家予算級の資本を持つ超巨大企業グループとなった。

母は『ジューディ・マツキエネン』というワークネームを持っており、仕事の時はそちらで呼ばれる。

その為普段は平均的な生活水準に合わせている。

だからお金持ちの人が大抵持つてるものは全く持ってないけど、いざという時に自由になるお金は結構多く貯えてる。

高等部の体育館。

ここでは、試験召喚大会の各試合が行われている。

今年は生徒・教員あわせて64組が参加。

試験召喚大会のルールは、普段と変わらない。

ただクラス無関係のタッグバトルになっただけ。

使用する科目は毎回固定のため、優勝するには総合的な強さが求められる。

組み合わせは抽選の結果…私・秀吉組と雄二・明久組は、うまい具合に反対側になった。

さて、緒戦の相手は…。
3年生のコンビか。

『よろしくお願いします』

一礼をして構える。

「貴女達が相手か…慣らしにもならないわね」

3年コンビの片方がバカにするように言い放つ。
無理もないか…Fクラスが相手では油断も出る。
だが秀吉はともかく、私をただのFクラス生徒と認識した時点で勝敗は決まっていた。

一回戦の科目は英語。

『サモン試獣召喚!!』

合図で出現する私達4人の召喚獣。

英語

3年Dクラス

小谷野深雪

104点

福浦愛弓

115点

2年Fクラス

木下秀吉

197点

フェイト・ハラオウン

655点

『なっ！？』

相手の2人が驚愕する。

「アンタ達、何でFクラスなのにそんな点数なの！？

おかしいじゃない！！」

「思い出した…！！」

「何よ愛弓！？」

「…あのフェイトって子、学年首席でありながら病欠で振り分け試験を受けられなくてFに落とされたって噂があるの！」

「な…何で早く言わないのよ…！」

はいはい…仲間割れは後でやってね。

私と秀吉の一閃で、相手はあえなく消滅した。

…召喚獣の話だからね？

2回戦は現代国語。

相手は…ええっ、はやて・翔子組！？

参ったな、2人ともかなり点数高いからなあ…。

片方は何とかできるけど…もう片方に、やられるかもしれない。

悩んでも仕方が無いので、とりあえずは次の試合までクラスへ戻る事に。

雄二・明久組も勝利を収め意気揚々とクラスに戻ってきた。

2回戦までクラスの出し物に専念している途中、事件が起きた。

「何だよこの店は！」

こんな汚えもんテーブルにしてんのか!？」

「うわ、最悪だな！」

こんなんじゃ食う気なんて起きねえよな!！」

わざと声を張り上げて他のお客の目を引き、仰々しくクロスをめくって中にあるみかん箱を見せる。

くっ…ここまで露骨に妨害してくるとは！

私が齒噛みすると、雄二が耳打ちしてきた。

「…すまんが、奴等の相手を頼むぜ。

俺は対応策を用意してくるからよ」

私は頷き極力怒りを隠して2人に歩み寄る。

「…お客様、少々よろしいですか？」

「ああ、何だよ!？」

うわぁ、チンピラそのものだな…。

私は表情を変えずに、席を立つよう促す。

「…何か、ご不満がございましたか？」

「はあ！？」

寝ぼけんな、あんな状態のテーブルで…うお！？」

私は、坊主頭の男子生徒に足払いをかける。

「て、テメエ！！」

何しやがる！？」

「当店の対応マニュアルのひとつ『足払いから始まる交渉術』です
が？」

「テメエ、ふざけやがって…ぐわっ！？」

倒した男子をピンヒールで蹴る。

「…対応マニュアルその2『サッカーボールキックでつなぐ交渉術』
です。」

どうですか…まだ『交渉』なさいますか？」

「テメエ…！！」

覚えてろよ！！」

ソフトモヒカンの方が私を睨み付け、2人でそそくさと出ていった
瞬間…拍手と歓声があがった。

…蹴り飛ばした時、誰かが写メを撮ってたような気がする。
そつえば、着替えるのが面倒だからと朝からずつとチャイナの…
まま…で…まさか!?

「……我が生涯に、一片の悔い無し……!」

土屋くん…ムツツリーニがデジカメを構えたまま気絶していた。

…やっぱり!!

蹴った時にチャイナの下側が、舞い上がって…その…ダメ、これ以上は女としての沽券に関わる!!

後で、記録メディアを没収しておかなきゃ…。

…あの2人が騒いでついた悪いイメージは完全に払拭できず、数学の竹原教頭を皮切りにお客が次々と席を立っていく。

そこへやつと雄二達が準備していた『対応策』が到着した。

「申し訳ございません!」

…予定していたテーブルの準備が遅れ、急遽代用品としてこのようなものを使用しておりました!」

早速テーブルを入れ換える雄二達。

どうやらこれは、演劇部にあったものらしい。

その後も試合の時間と相談しながらテーブルの交換を行った。
応接室からの強奪したりと決して、誉められたやり方ではないが。

2 回戦。

私達にとつては、ある種の山場となる。

ちなみに雄二・明久ペアはあの根本恭二との対戦。

「… 1ヶ月前の恨み、今日晴らせて貰うで！」

… あれ、何ではやて怒っているの？

「… 今回も、負けない」

翔子は相変わらずだが。

現代国語

2 年 A クラス

霧島翔子

3 3 4 点

八神はやて

3 0 1 点

2 年 F クラス

木下秀吉

1 2 4 点

フェイト・ハラオウン

6 5 5 点

向こうの 2 人が勢いよく、こちらに突進してくる。
狙いは… 秀吉。

こちらと同じ作戦か！
だが…遅いッ！！

霧島翔子

334点

八神はやて

0点

木下秀吉

97点

フェイト・ハラオウン

555点

2人が秀吉を倒すより早く私のはやてを倒した。

私の点数が減っているのは『ソニックムーブ』という特殊能力を使ったから。

「な…またしても！？」

やっぱり、400点越えてないときついわあ…」

「私達の戦法を潰しただけでなく、同じ戦法で返してくるなんてね…。」

この試合、棄権します」

「…それが賢明やな。

このまま戦っても、勝てるとは思えへん。

全く、何でフェイトちゃんFクラスなんや…」

勝てないと悟った翔子が、試合を放棄した。

3回戦からは体育館で明日行われる。

雄二・明久組も、3回戦に進んだようだ。
パートナーと交渉して棄権させたい。
しかも試召戦争の時に撮影した『例の写真』を使つたとか。
うーん、自業自得とはいえ少し根本君が気の毒。

トラブルもあったものの、1日目は無事終了。
売上目標も大きく上回り、大成功と言える。
明日は一般客が入るので、更なる集客が見込める。
頑張つて売上を伸ばして、約束を果たさないとね。

喫茶（後書き）

リンディさん、企業の会長だったんですね。

アルフは聖祥高校…なのはシリーズの聖祥学園高等部に通っています。
聖祥高校と聖祥大は、設定では存在するらしいですからね。

次は清涼祭の2日目。

大会（前書き）

清涼祭の2日目。

強引に終わらそうとしたら5000字を超えてしまう事態に…。

大会

清涼祭2日目。

日曜とあつて、朝から一般客の入りが凄い。

当然私達のクラスもお客の入りが昨日以上で、交代も覚束無いくらい忙しい。

A・Bクラスという強力なライバルもいたが、回転率の差が出てわずかに私達の方が上回っていた。

ちなみにAクラスははやての案でコスプレ喫茶、Bはフリマ（買い取りもOK、但し高価なものはNG）をしている。

朝イチで3回戦に出場する私と秀吉は体育館。

召喚大会もここからは公開されるため、ギャラリーが昨日の何倍もいる。

中には学園のスポンサーもいるらしく、あまり無様な試合は見せられない。

今度の相手は教師の2人、シグナムとシャルダ。

どちらも担当科目ではないが、教師なのでそれなりに点数は稼いでいるはず。

苦戦は免れない。

3 回戦の科目は日本史。

「フエイトちゃん…。」

あなた達なら勝ち上がってくると思ってたわ」

「…姫路ではなく、木下と組むとなった時は正直な話どうかと思っ
たが…お前には関係なかったか。」

私もシャマルも、日本史の点数は低いから…ひよっとしたら勝てる
かもな？」

日本史

教員

八神シグナム

4 5 9 点

教員

八神シャマル

4 3 7 点

2 年 F クラス

木下秀吉

1 1 2 点

フエイト・ハラウン

5 6 1 点

くっ…さすがに教師というだけあって、担当科目ではなくても 4 0
0 点を越えてくるか…!!

試合開始。

「打ち砕け、無限の閃光…ファランクスランサー！」

まず私が同時攻撃スキルで2人の点数を大きく削り、秀吉との差を減らす。

八神シグナム

235点

八神シヤマル

207点

フェイト・ハラオウン

441点

私とシグナムが鎧を削っている間、秀吉がシヤマルを狙う。

『はぁあっ!!』

『くっ!!』

八神シグナム

101点

八神シヤマル

176点

木下秀吉

0点

「やはり、敵わぬか…」

シヤマルの反撃で、秀吉が倒されたが気にしない。
ここまで点数を減らせれば逆に成功と言える。

八神シグナム

0点

フェイト・ハラオウン

397点

「く…無念だ」

よし…シグナムは倒せた、これだけ点が残ってれば負ける事はない。

私がそう確信したその時、召喚獣に異変が。

「つかまえ…たっ!!」

なんと私の召喚獣の胸から手が生えている。

よく見てみるとシャルの召喚獣が、亜空間のようなものに手を突っ込んでおりそれを通している。

その間私の点数がどんどん減って、シャルの点数が少しずつ回復している！

八神シャル

214点

フェイト・ハラウン

240点

「もうちょつと削れるかと思ったけど…こんなところかしらね」

まずい…これでは勝てるかどうかかなり怪しくなってきた。
先の先を取らないとここで負ける！

「…はあっ!!」

「…ええいつ!!」

攻撃がクロスして、爆煙があがる。
そして…。

八神シャマル

0点

フェイト・ハラウン

4点

非常に厳しい戦いだっただが何とか勝つ事ができた。

「…見事だ。

初手の攻防で我々の敗退は決まっていたのだな…」

「木下さんが穴だと思ったけど、それを完璧にカバーしちゃうなんてね…」

熱くて激しいハイレベルな一戦に観客のボルテージは上昇。

次の試合まで時間はあまりないが、校内を見て回る事にした。

校内は、人でごった返している。

学園祭は大抵秋に行われるものなので、珍しいというものもあるのだろう。

適当にぶらついていると、いつの間にか3階に戻ってきてしまっていた。

折角なので、Aクラスでも覗いていくか。
もちろん後でBクラスにも行くけど。

『…お帰りなさいませ！
お嬢様！！』

Aクラスに入ると、様々なコスプレをした女子生徒達が出迎えた。
ほとんどが、何処かで見たような格好をしている。

一人に案内され席につき、別の人がメニューを…ってはやて！？

「…フェイトちゃん？
何や、偵察か何かか？」

はやては黒髪ツインテールのウィッグと何故か猫耳をつけ、真紅のドレスを着ている。

しかも緑色のカラコンまでしており、一見はやてとはわからない。

「…まさか『赤い悪魔』のコスプレとは思わなかったな。
はやての事だから、きつとパ　カルコスだと思ったのに…」

「そうしても良かったんやけど、当たり前すぎるからこっちにしたいんや。」

オーダー取りたいんやけどええかな？」

「あ…ごめん。」

じゃあ…ふわふわシフォンケーキを。

飲み物は…お任せで」

「かしこまりました♪」

私の近くを離れオーダーを奥のキッチン担当に伝えるはやて。
3分後、注文したケーキと紅茶が運ばれて来た。

うーん…正直言って翠屋に匹敵する味だ。

フロアを歩き回るスタッフ（女子生徒）を改めて見てみると、実に

様々な衣装を着ている。

『悪人に人権はない』…と豪語するヒロイン、反逆の皇子に力を与える人。

中には、世界一有名な団長までいる。

準々決勝は化学・物理。

相手は3年Aクラスだったが、この教科1000点を越えてる私の敵ではない。

それよりも今は、少し前に聞いた雄二達が出場してる理由だ。

来月にオープンする『如月ハイランド』のチケットを回収するためらしい。

学園長に優勝しろと言われている以上、私達が決勝に進めばどうやっても私達が勝ってしまう。

そうになると、次の準決勝で負けるのがベストか…。

ちなみにFクラスは極めて順調で、このままだと用意していた材料全部無くなるらしい。

要所要所での宣伝が、効きすぎたかな？

準々決勝の後、Bクラスに寄ってみた。
フリマをやっているって話らしいけど。

「あ、フェイトちゃん！
いらっしやい！！」

丁度なのは中にいた。

なのはは、召喚大会に出ていない。

私は並んでる商品を一通り見ていく。

そして、ある品に目が留まった。

「あ…これ結構いいな。
これ貰えるかな？」

シンプルだが味のある銀のクロス付チョーカー。

「それは500円だね」

新古品の割にちょっと高い気もするが、私は気にせず購入した。

やっぱり、友達に協力してあげないとね。

そうこうしているうちに、準決勝となった。

科目は数学。

対戦相手は…。

「ハラオウン、お前が勝ち上がってくるとはな。
正直意外だったぞ」

「…でも、数学でアタシに勝てるかな？」

鉄じ…西村先生とヴィータである。

鉄人はともかくヴィータは数学担当…はっきり言って勝てる気がしない。

でも、だからといって棄権する気はないけど。

「…生徒が教師に勝てないって誰が決めたんです？私達が3回戦でそれを証明したはずですが」

すると、ヴィータが不敵な笑みを浮かべた。

「おし、良く言った！

ならこつちも手加減しねえぜ！！」

数学

教師

西村宗一

338点

教師

八神ヴィータ

1076点

2年Fクラス

木下秀吉

158点

フェイト・ハラオウン

852点

……。

鉄人は秀吉の倍以上、私もヴィータに224点の差をつけられている。

普通にやったら絶対に勝つ事は不可能。
なら、取るべき手はひとつしかない。

「いけえええ!!」

（ドオオオン!!）

ヴィータの召喚獣の巨大なハンマーが、寸前まで私の召喚獣の立っていた場所に炸裂する。

秀吉も鉄人の攻撃を何とかかわし続け、点数をキープしている。

（ヒュン!!）

「むっ、しまった!？」

「…遅いですよ!!」

一瞬の隙を突きヴィータの視界から消え、鉄人を攻撃して戦闘不能にする。

西村宗一

0点

八神ヴィータ

899点

木下秀吉

150点

フェイト・ハラオウン

777点

少しはマシになったけど…気を抜けば瞬殺されるのは間違いない。

回避一辺倒を維持しつつ、ちまちま点数を削る戦いを展開していた。

「…あゝ、じれってえ!!
めんどくせえからこいつで決めてやる!!」

突然ヴィータがキレて大技を放つ。

…これ待ってたんだ!

「豪天爆碎!
ギガントシュラーク!!」

秀吉は避けきれずに直撃を受けて戦闘不能。
だが私は何とか回避に成功し、後ろに回り込み一撃を見舞う。

八神ヴィータ

415点

木下秀吉

0点

フェイト・ハラオウン

707点

…これで決まった。

私がスピードで翻弄しつつ攻撃を加え、ようやく倒す事ができた。

八神ヴィータ

0点

フェイト・ハラオウン

265点

「あゝ、くそっ!

担当科目で負けちまうとはな…」

「生徒が相手だからって、油断してたのが敗因」

「ち…その通りだな。」

反論はしねえよ」

たぶん一番苦しい戦いだったが、何とか勝利を納める事ができた。

雄二・明久組の相手は昨日営業妨害をしてきた3年生2人組。

常村・夏川という苗字から「常夏コンビ」と呼ばれている。

あれでも3年のAクラスというから人は見かけで判断できないな。

Aクラスといっても彼らは平均的な点数なので翔子やはやてに比べたら相当戦いやすい。

ましてや、点数以上の力を発揮できる明久なら相手が3年Aクラスだろうと互角以上に戦えるはず。

そしてその通りに明久達は勝利を納め、決勝へと駒を進めてきた。
さて、どうしよう？

Fクラス同士の決勝だからこのまま戦ってもいいんだけど…。

向こうが学園長からの特命を帯びている以上、私達が勝つ訳にはいかないだろうし…。

「…ハラオウンよ、お主の思うままに決めればいいのではないか？
お主のおかげで、ここまで来れたようなものじゃからな…。」

明久達を勝たせる為に棄権したとしてもワシは文句は言わんぞ」

私が悩んでいると、秀吉が背中を押してくれた。

この言葉で私は決勝を棄権する事にした。

決勝は私達が諸事情により棄権したという事になり、雄二・明久組の優勝で幕を下ろした。

「ババア、約束は守ったぜ？
俺達は事情を話しただけで勝ちを譲ってくれた訳じゃねえかな」

雄二達が、学園長と話している。
「どうやら例の『特命』についてのようだ。

ちなみに今は終了後の後夜祭の最中だが、事情を知る私達は学園長室にいる。

「でもこれで僕達の任務も完了ですね。

…銀の腕輪のテストも…」

「バカ！

今その話はマズイ！！」

「盗聴の気配」

明久の一言に雄二とムツツリー二が反応し部屋の外で誰かが逃げる気配が。

こんな事するのは恐らく常夏コンビしかないない。

私達の動きを探れば大学の推薦を約束するとか言われたのだろう。

そして、黒幕は竹原教頭の可能性が高い。

彼は他の私立にも、頻繁に出入りしていると噂があり文月の技術などを他へ流すつもりで暗躍していたのだろう。

逃げる2人、追う私達。

「…旧校舎の屋上に打上げ花火用の機材がある。
それを使えばいい」

このままでは2人と竹原が接触してしまう。
そこへムツリーニが逆転の手を提示してきた。
私達は二手に分かれる。

私と秀吉が2人を追って、明久・雄二・ムツリーニが屋上へ向かう。

「…角度よし、風よし。
障害物…なし」

旧校舎屋上。

明久達が花火の機材を放送機材がある新校舎屋上へと向ける。
機材をバズーカ砲のように抱えるのはもちろん明久の召喚獣。
雄二は、召喚フィールドを『腕輪』の力で展開させている。
科目は総合…そう、決勝で私達と戦うはずだった科目なのだ。

「あいつら、追って来ねえな…？」

「構うかよ、どの道これで俺たちの勝ちだ！」

…常夏コンビが放送機材を操作している。
盗聴した会話を放送…いや曝露するために。

私達は、屋上への踊り場で追うのをやめた。

彼らは…知らない。

打上げ花火が自分達…いや放送機材を狙っていることを。
そして…。

花火が撃ち込まれた。

もちろん、打上げ花火…といっても本格的なものではない。

あれは専門の職人でないと扱えないため、誰でも手にできる市販の
打上げ花火を使っている。

「…ん？」

お、おい…常村！」

「何だよ…げっ！」

あいつら、正気か!？」

それと同時に機材めがけて花火が発射された。

会話が記録されたメディアを確保する時間など、あるはずもない。

…一目散にその場を離れる常夏コンビ。

機材に花火が命中する。

これで、竹原の企みは阻止できたはずだ。

…ちなみに常夏コンビは、私達がきつちり「お話」をしておいた。

余談だが竹原は清涼祭の後転任していった。

色々な事があった清涼祭もまもなく終わる。

私にはあとひとつ、仕事が残っているのだ。

『…発表します！
今年のミス清涼は…！！』

体育館では後夜祭名物？のイベントであるミスコンが行われていた。
対象は2・3年のみ。

ちなみに審査の上で公平を期す為、所属クラスは伏せられている。

知らないうちに、私も登録されていた…。
仕方がないので形だけでも出る事に。

『…2年Fクラス！
フェイト・ハラウンさんです！！』

…え、私？

館内が驚きに包まれるが、すぐに拍手の嵐になる。

『おめでとうございます、2年生の優勝は初めての事ですよ！！』

「あ…ありがとうございます…。
まさか自分が勝ってしまうなんて思わなくて…」

司会者の賛辞に、私は照れながら返す。
館内のボルテージは最高潮に達した。

「…それじゃあA・B・Fクラスの成功と明久君達の召喚大会優勝、
フェイトのミスコンの優勝を祝して…乾杯ッ！！」

『かんぱ〜い!!』

後夜祭後。

私達と一部知人達は翠屋で打ち上げを改めて行っ事になった。

Fクラスでやった喫茶店の売り上げは…畳・卓袱台・座布団を全て新調しても、まだ余るくらい。

実はムツツリー二の発案で『ウエイトレスと撮影』というのを行っていた。

…もちろん有料で。

それがなかったら、とても設備を元の卓袱台や座布団に戻せなかった。

設備戻しは学園長の許可も取っているの、卓袱台と座布団だけでなく壁の補修や畳の総入れ替えも同時に行っている。

…え、そこまでやると凄いいお金かかるだろって？

母があらゆるコネを使って安くあげてくれたから売上利益でできたの。

私達は勿論各種ジュース、桃子さんやエイミィなどの成人組はゼロアルコールのビールを飲んでいる。

楽しく歓談しながら3時間ほどでお開きになる。

明久が瑞希を送っていくという事になり、私達も各々の帰路についた。

…後で聞いた話によると、途中で瑞希が明久にキスをしてたのかなんとか。

…べ、別に羨ましくなんかないんだからねっ!？

…これから暑くなっていくから体調には充分気を付けないと。

大会（後書き）

…色々と説明不足ですいません。

原作の清涼祭にミスコンはありません。

…たぶん。

次は合宿が肝試しか外伝で海水浴あたりかも。

合宿（前書き）

合宿編・その1。

この話には一部エロ表現が含まれています。
閲覧は、自己責任でお願い致します。

合宿

6月下旬。

ここは、郊外にある大型の宿泊可能な施設。

文月学園所有の合宿所で、400人まで泊まれる。

文月高等部では毎年、この時期になると学年別に勉強合宿がある。学年で合宿地が違うのは、1000人の収容力を持つ合宿所となると巨大すぎて金が掛かるかららしい。

ちなみに昨年、設備に差はなかったので全員が大型の観光バスで行った。

だけど、今年は…。

「現地では合同だからってこんなところに差をつけなくたっていいだろう!？」

雄二が、担任のシグナムにくっついてかかる。

「そう言われてもな…。

学園長の方針だから私にはどうにもできんさ」

申し訳なさそうに、視線を落とすシグナム。

ここが、鉄人と彼女の違いなのかもしれない。

雄二も、みんな不満なのもわかる。

Aクラスは、55人乗りの大型観光バス。

しかも補助席なしの、特別仕様。

B、Eクラスも、程度の差こそあれど現地への移動はバスを使う。しかし、私達Fクラスには更に厳しい仕打ちが待っていた。

「ともかく遅れるなよ。」

Fクラスは……」

一呼吸おいて。

「現地集合だからな」

『案内すらないのかよ!?!』

私を含めた、クラスのほぼ全員のツツコミが教室中に響き渡った。

当日、海鳴駅。

現地が少し遠いのと、集合時間が割と早いため始発に近い時間に出ないと遅れてしまう。

現在の時刻は朝5時、私が一番早かったようだ。

ちなみに朝食はコンビニのお弁当ですませている。

…いつもより多目に。

さすがに切符は支給されているので、このまま電車に乗ればいい。

ここで合流するのは海鳴に住んでる雄二と明久と美波と瑞希。他は家の最寄駅が違うのでそこから乗ってくる。

少し待っていると、3人がやってきた。

「おはよ、3人とも」

「随分早いな…ま、遅れるよりはいいけどよ」

雄二と軽く話す。

来たのは雄二・明久・瑞希で最後に美波。

自動改札を通る前に、駅の近くにあるコンビニへ寄る私達。

美波が朝食べてないと言うので、私が奢ってあげると言ったのだ。
現地まで何も食わずに居られるとは思えない。

まして、美波のように基礎代謝の高い人は特に。

ついでに飲み物を調達して私達は一路合宿所最寄駅に向かう列車に
乗り込む。

何度か乗り換えをして漸く到着、ここから少し歩く…駅に近くてよ
かった。

文月学園合宿所は、自然が豊かな場所にある。

私達が着いた頃には、他のクラスは既に着いて寛いでいた。

…移動時間の差は如何ともし難いな。

この合宿所は2階が生徒の寝室、3階が大ホール。
地下に大浴場がある。

1階は食堂や先生達の部屋などになっている。

ちなみに2階と地下は男女別になっている。

合宿は3泊4日で行われ、勉強は全クラス合同。

ただ全クラスの授業内容を絶妙にミックスしたものであるため、私達Fクラスは勿論他でさえ理解できない事があるとか。

どうしてこんな面倒な事をするのか、シグナムに聞くとこんな答えだった。

「モチベーションを上昇させる為だ。

あえて同じ環境で勉強させ『こうなりたい』…或いは『こうなりたくはない』と意識させ、学習意欲を向上させるのがこの合宿の目的なんだ」

午後から4時間ほど勉強となっている為、2階右側の女子部屋に荷物を置き3階ホールへ向かう。

現国・数学・英語の、通称『必修3教科』を4時間でやった後は夕食を除き自由時間。

大浴場は23時まで、消灯時間が0時となっているがそれまでは完全に自由。

軽く予習や復習をするのも良し、友人と楽しく過ごすも良し。

あまり大騒ぎしなければ、何をやってもいい…ただし常識の範囲内で。

1日目は何事もなく終わる…と思ってたら、ちょっとした事件？に遭遇した。

それは大浴場で起きた。

男女別浴とはいえ、地下の専用フロアだけあって相当広い。
洗い場も多く、50人程度なら楽に入れそうだ。

空いている洗い場を探してそこへ座る。

洗面器にお湯を溜め、体を洗おうとしたまさにその時突然視界を塞がれた。

「ひゃう!？」

『だ〜れだ?』

…古典的なイタズラ。

この声は…。

「な…なのは!？」

「ピンポ〜ン♪」

視界が戻り、鏡越しに後ろを見るとなのはがいた。

「…フェイトちゃん、背中洗いつこしよっか。

小学生の時みたいに」

さらっととんでもない事を言い出すのは。

「…へっ!？」

い、いいよ!

あの頃と違って今は一人でできるから!」

慌てて拒否する私。

「いいからいいから」

そう言つてボディソープを強引に奪い、タオルに取るなのは。ううゝ、こういうところは昔と同じなんだな…。されるがままに、なのはに背中を洗われる私。

「…フェイトちゃんの肌、凄く綺麗だよな。昔よりも、ずっと…さすがミス清涼だよな」

なのはは、からかい気味に言う。

「はい、おしまい。」

それじゃ『前』いくよ」

…え、前？

「ちょ、なのは！？」

前つてそれはいくら何でもダメだよ、他人の目があるのに！」

全力で拒む私だが、そこにいたのは悪魔だった。

「…拒否は認めません。」

それにいつもと違う可愛いフェイトちゃんをみんなに見てもらいたいし。

大丈夫だよ、ここは女湯…恥ずかしがる必要どこにもないんだよ？」

まずい、普段通りに見えて目が完全にイッてる！

何か、何か突破口はないのか！？

…私は周りに視線で助けを求めるが、他の女子達は皆視線をそらす

ばかり。

あう…皆嫌いだ！

そうしている間にも、魔の手は迫ってくる。

そして…。

「…ひゃうっ！？」

「…わ、やっぱりフェイトちゃんは大きいね。

瑞希ちゃんもかなりのものだけど、ある意味それ以上かもしれないな」

そう言いながら、なのはは洗うふりをしながら…私の胸を揉む。

「や…っ！

な、なのは…ダメ…！」

「ん…、何がダメなの？」

念入りに洗ってあげているだけなのにね？」

…やっぱり、なのはは悪魔だった。

「そう言っ…さっきから動いてる手は、何…！？」

「マッサージしてあげてるんだよ？」

さも当然といった口調で、あっさりと言い放つ。

まだ浴槽にも浸かってないのに、体が異常に火照って来た気がする。もしかして…私、興奮しているの？

…まずいな、こんな状況でそんな事が知られたら変態だと思われる。

私は色々な意味で、必死に耐える事にした。

しかし、無情にも私の後ろにいる悪魔はそれを許さなかった。

「んゝ、中々頑張るね。」

それじゃあ、これならどうかな？」

そう言うと、徐におへその真下から指を這わせる。

「ん・んっ…!？」

「あはは、どうしたの？」

何に反応したのかな？」

あくまでシラを切る後ろの悪魔。

「ひ…酷い、よお…。」

そんな、ところ…っ!？」

急に下腹部が疼く。

見るとなのは指が、俗に言う『大事なところ』へと潜り込んでいた！

「な、のは…あ！

さすが、に…そこは…ダメ…だよお…!!」

「なんで？」

昔と同じようにしてるだけなのに何がダメなの？

私、よくわからないよ」

結局…この悪魔に終始抵抗できなかった。

残ったわずかな時間で体を洗い直し、浴槽には浸かる事なく大浴場を出る羽目になった。

私が出た後に、覗き騒ぎがあつたらしいが…今の疲れきつた私には
どうでもいい事だった。

長時間の移動に勉強疲れ、大浴場の一件…。

部屋についた私は早く横になりたくて、自分の布団へ倒れ込むよう
に伏した。

今日は本当に色々な意味で疲れた…。

合宿（後書き）

粉／＼、ナナ氏の意見を参考に書きました。

次回は明久達と一緒に覗き疑惑を追う…かも？

反撃（前書き）

合宿完結編。

前回と同じく一部エロ表現が含まれています。
閲覧に関しては自己責任でお願いします。

反撃

2日目の朝。

1階ホールが騒がしいので行ってみると、Fクラスの一部生徒…ムツリーニと明久が何やら大昔の拷問を受けていた。その近くでは雄二が翔子にアイアンクローを食らっていた。

「な…何があつたの？」

私は一番近くにいた美波にこの事態の訳を聞く。

「あれ、知らないの？」

覗きよ覗き、このバカ共は昨日大浴場を覗いた疑いがあるの」

「覗き…つて、ええ！？

それは本当なの！？」

私は、アイアンクローからようやく解放された雄二に真偽を問う。

「いてて…。

誤解だ誤解、俺達はそんな事してねえ…誓つてもいいぜ。

なのにこいつらはハナから俺達を犯人扱いだ、全く…確証もねえのに疑うヤツがどこに居るってんだよ」

「濡れ衣って訳か…。

なら、ちゃんと調べる必要があるんじゃないかと思うんだけど…」

こういう場合、アリバイを洗ってみるのが捜査の定石だと思う。

だけど容疑者が多すぎる上に、口裏を合わせる可能性も高い。

…証拠を集めるのが困難な以上、捜査のしようがないのだ。

「…ともかく翔子も瑞希も美波も、ここは私に免じて許してあげて本当にやってないのなら、恨みが残るだけだよ」

「…まあ、フエイトがそう言うなら…ねえ？」

美波達は渋々といった様子で、明久とムツツリー二を解放する。

二人が受けていたのは正座している脚の上に石の板を重ねるという、江戸の末期まで行われていた拷問。

…本式はギザギザした石の上に座らせるが。

ピンと来ない人は、某医療タイムスリップ漫画が原作のドラマを見てね。

作者さんがこれを書いてる時点では、もう放送は終了してしまったけど。

…2日目の合宿授業も漸く終わり、自由時間。

私は男子の部屋に行つて、状況を整理する事に。

館内の見取り図のコピーを持って。

「…まず、館内の構造からいくね。

ここの大浴場は1階の階段でわかれていて、基本的にここからは完全に別。

つまり女湯に行くには階段か、ボイラー室を経由する二つのルートしかない。

ボイラー室は常時施錠されてるし、階段から行っても入り口で教師…昨日は鉄人が立っていたから実質的に侵入は不可能。

これで騒ぎが起こるとは、とても思えないけど…」

状況を整理すればする程、不可能犯罪に感じる。

「だが実際騒ぎが起こったんだ、どっかに穴があったって事だろ？」

尤もな意見の雄二。

「…あと考えられるのは、被害者の勘違いとか。元々そんな事実はなかった…って線かな。

私が出た時は、シグナムが入り口において…その後すぐ鉄人と交代したって」

私は例の件の実現不可能さに溜め息が出る。

「…今回の件は、状況的に不可能という事から不問とするみたい。私も注意するけど、バカな事は考えないでね？」

男子達に一応釘を刺して、私は一旦自分の部屋へ戻りお風呂の準備をする。

女子大浴場。

えっと…どこかな？

あ、いた…。

髪を下ろしているけどあの姿は間違いない。

私は気付かれないように、彼女の後ろに座って視界を奪う。

「…きゃっ!？」

「…だ〜れだ？」

最初こそ驚いたが、すぐに冷静な声が返ってくる。

「…フェイトちゃん」

「あたり…もう少し、動揺してほしかったな」

少し残念がる私。

「同じ事やって、驚かれる訳ないよ？」

「それもそうか。」

…昨日は洗いつことが言いながら、なのはの体洗ってあげられなかったし…今日そのお返しだよ」

ボディソープをタオルへと取り、泡立てていく。

「そういえば、こうやってフェイトちゃんに体洗って貰うのも久しぶりだね」

そう…中学に進んだ頃から私は、なのはと一緒に入浴しなくなった。体が成長してきたからか、女同士でも恥ずかしい…というのが本音。

「じゃあ、前いくよ？」

腹部から脚・腕、首周りを擦り…いよいよ『お返し』に入る。

「…本当にやるの？」

「自分であんな事しといて今更何を言ってるの？
拒否も抵抗も認めないから覚悟しなさい？」

その時の私はなのは曰く、夜叉に見えたらしい。
昨日なのはが私にしたのと同じ事をする。

「ひゃんっ！？」

わ、私そんな激しくはしてないはずだよ！？」

「そうだっけ？」

まあ、そんな事はどうでもいいけど」

なのはの柔らかな膨らみを優しく、それでいて力強く弄り倒す。
もちろん、ちゃんと洗ってあげるのも忘れない。

「だ…ダメ、だよ…！」

そんな風に…されちゃったら、私…！」

こういう状況でのなのはは割と…いや、かなり強気になるんだけど。
こんな可愛いしいのも結構グツと来る、というか。

「何がダメなの？」

昨日なのはがやったのと、同じ事をしているだけなのに？

あれのせいで私が、どんな思いをしたのか…なのはも思い知ればいいよ」

私はそう言つと、なのはの脚の付け根…大腿のあたりから指を這わせる。

「やあ…っ…！」

フエイト…ちゃん…っ！

おねがい…だから…きのうの…ことは、謝る…から…許し…てえ…
っ！！」

息も絶え絶えに、懇願するなのは。
でも…甘い。

「…許す？
そんな甘い考えをしているのはは、お仕置きが必要かな？」

私は昨日のなののように悪魔の笑みを浮かべ、指を『大事なところ』へと滑り込ませる。

「あ…っ！

や…やだ…よお…っ！！

そんな…こと…されたら…私…おかしく…なっちゃう…よお…っ！
！」

懇願にも耳を貸さず、私はなのはを弄り続ける。

結局、なのはが糸の切れたマリオネットのようになるまで続いた。

今日は短時間ながら浴槽に浸かれたし、騒ぎも起こらなかった。
…後でシグナムにたっぷりしぼられたが。

3日目。

朝から明久達が、こそこそ話し合っている。
まあ、例の騒ぎの事だろうけどね。

本日も午前・午後共に異常なし。

「いいか、ここは全クラス押さえとけよ！
今度の期末に、ここを出すからな！？」

今のはもちろん、数学担当ヴィータ。

…そんな感じで合宿授業は進んでいく。

この日も授業が漸く終わり自由時間。

まだ明日もあるが、かなり学力が上がったような気がする。

夜、取りきれずに蓄積した疲れを取るべくゆっくりとお風呂を楽しんでいた時のこと。

何やら外が騒がしいな…と思いつつも長湯する私。

しかし…今にして思えば、それがいけなかった。

そろそろ湯あたりしちゃうかな…と思い、浴槽を出たところで浴場入り口の扉が勢い良く開かれた。

（ガラッ！！）

扉を開けたのは…。

「……………」
「……………」

明久達を含む、多くの男子達だった。
ちなみに雄二はいない。

「……………っ！！」
『おおおおお！！！！』

バ力達は歓声をあげ、私は声にならない悲鳴をあげてしまう。
あれほど釘を刺したのに…がっかりだよ。

ちなみに今回の件は物量に任せて防衛網を突破するというものだったらしい。

合宿後。

3日目の件は2年男子総勢149名が同時に1週間の停学になる、
教育史上前代未聞の事件となった。

被害にあった私も、一学期一杯全クラスの男子と口をきかない事にした。

そうこうしている内に期末試験が終わり、夏休みへと突入する。
漸く1/3が終わったか…と、色々な意味で溜め息が出るのだった。

反撃（後書き）

ダメだ…うまくオリジナルの展開に持ってけない。

次回は、合同肝試しあたりかなあ…？

期末（前書き）

期末試験編。

当初は補習と合わせ一本にするつもりでしたが…。

ようやく『あの人』も登場しますよ。

期末

…それは、一通のメールが始まりだった。

差出人は明久。

開いてみると…ただならぬ様子を感じさせる文章。

『ちよつと、頼みを聞いてくれないかな。

僕の沽券と、生活に関わる重要な事なんだ。

詳しい事は、頼みを聞いてくれたら話すよ』

私は彼に承諾の旨を伝えるメールを送った。

話を聞いてみると、海外にいた姉が突然帰国し明久のいる実家に帰ってきた…という事らしいのだ。

しかも、明久の生活態度を評価しマイナス要因は容赦なく減点。

その減点を含めて振り分け試験以上の結果を出さないといけないらしい。

…つまり、減点100なら振り分け試験の時の成績に100点以上乗せなければいけないらしい。

だから姉を納得させて帰らせるため『真の首席』とか言われている私に、勉強を教えてくれ…と泣きついてきたのだ。

協力するのは吝かじゃないけど…Fクラスは、瑞希を除いてみんな対策を講じる必要があると思う。

結局話し合いの結果、期末まで私の家で勉強会をする事になった。

参加するのは明久・雄二・ムツツリー二・秀吉・私・美波・瑞希・翔子。

なのははやても教える側として参加している。

「あつ、皆いらっしやい…フェイトならもう待ってるから遠慮なく上がって」

母リンディが玄関で一同を出迎える。

居間で勉強会が始められる…うちは母と兄が自分専用のテレビを持っているのでその辺は困らない。

みんな放課後直で来ているので、最初に勉強会の事を家に連絡しておかなければならない。

…と思つたら、連絡は既に済ませたようである。

…何だか明久は、例の姉と揉めていたようだが。

「期末まで10日、全教科満遍なくやっていたのでは間に合わないだから、各々の最も苦手な2、3教科に絞って進めていくよ」

「得意科目を強化するよりこの方が多く点数を稼げるからな」

…みんな文系が苦手みたいやし、文系はしっかり暗記さえしてれば結構稼げるもんやで？」

はやてと教員志望のなのが説明する。

「ほな、早速始めよか。」

1秒たりとも無駄にできんのやる？」

私・瑞希・翔子・なのは・はやてが教える側、明久・雄二・秀吉・美波・ムツリーニが教わる側。

明久にはシグナムじゃないけど、特にみっちりと教えなければいけない。

なにせ、独り暮らしを維持できるかどうかがかかっているのだから。

「…もう、さつきも教えただしょう？」

ここはこの人の心境を読み取るんだからこつちが正解なの」

「この単語は否定の意味を持つから、ここでは適切と言い難いんや。だからこつちの方が意味は通るんやで」

「この年は特に重要な意味を持つ事件が起きているんです。だからかなりの確率で試験に出されるんですよ」

…こんな調子で、勉強会は進む。

結構な時間が経ったので、休憩を入れる事に。

「…いや、本当に助かったよ。

姉さんの理不尽な減点が、もう僕一人だけじゃ無理なレベルまでつけられているからね」

明久が、勉強会に賛同した私にお礼を言う。

「俺もこいつに聞いたんだが、かなり点数を乗せないといけないらしい」

「…一体、何点を乗せればいいの？」

私が無気なく聞き、明久が俯く。

「…総合科目で、250点以上」

「250…!？」

それは結構厳しいね。

でも…点数低い強化を重点的にやってるから、何とかなるよ。

最後まで、希望を捨てちゃいけない…諦めたらそこで試合終了だよ」

安 先生のセリフで発破をかける私。

とにかく、これから集中的に勉強会をやっていないと明久だけでなく雄二達も危ういのだ。

私達は試験最終日前日まで毎日、自分達の勉強を犠牲にしてもこうして集まる事にしたのだった。

試験直前の土曜、勉強会は本番前の総復習をする事になった。事前に少しずつ作っていた専用の小テストを使って、みんなに自信をつけさせるためである。

「…はい、それじゃ今から期末前のお復習小テストを始めます。制限時間は各教科50分、自分の力で解く事」

本番では、10教科を5日かけて行っただが…今日は10時間かけ全教科通しで行う。

そのために、わざわざ全員予定を開けてもらった。

教科の順番は本番と同じく数学・保体・英語・公民・古文・化学・生物・現国・日本史・世界史。

ちなみに2年生では化学は物理、生物は地学・公民は地理と一緒に3年進級時にそれぞれ選ぶ事になっている。

朝9時に集まって夜10時過ぎまでいる…こんな事をやってるのは多分日本中、いや世界中を探しても私達だけだろう。裏を返せばそれだけみんな必死だという事だが。

12時を回り、お昼休憩をとる。

ここまで3教科終了して、手応えはまずまずといった感じだろうか。

「はい、皆お疲れ！」

しつかり食べて残り7教科頑張つてね！」

義姉のエイミイが、自慢の特製・富士宮風焼きそばを持ってくる。

彼女の得意料理の1つで、私や兄もお気に入り。

母・義姉・妹の3人で協力して、20人前を用意したようだ。

もちろん、焼きそばだけという訳ではないが。

終わったテストは、義姉が採点している。

事前に解答も渡してあるので、それに沿って採点していけばいい…とは言っても惜しい答えにはをつけているようだ。

16時、6教科終了。

ここで30分休憩を入れる事になっている。

あまり長く続けても効率は上がらないからね。

「どう、各教科の手応えはあった？」

私は皆…特に明久に感触を聞いてみる。

「まずまずいいんじゃないかと思う。

これなら目標の1100点だって狙えるかも」

明久の総合科目は840点前後だと聞いている。

一般平均は1200点以上なので、100点を下回る教科が多いという事だ。

尤もそれはFクラスの大半に言える事だが。

8教科目が終わり、勉強会参加者と私の家族の16人での賑やかすぎる夕食。

「なのはとはやては昔からだが、高校でもこんな多くの友達がいたのか」

兄クロノが感心したように頷き、文月組に言う。

「こんな愚妹で申し訳ないが、くれぐれも仲良くしてやって欲しい」

愚妹って…クロノにそんな事は言われたくない。

…その後、残った2教科を終わらせて今日は解散。

日曜は小テストの見直しを軽めにやって、月曜からの本番に備えゆつくりしようと決めていた。

小テストの結果は…全員が普段よりも、かなりできていた。

明久は、1100点くらい難なく取れるんじゃないかというくらい。昼間、勉強会のストレスを晴らすため外出した途中で私はある人と出会った。それは、ラノベ新刊を買うため書店に立ち寄った時の事だった。

「あら…？」

違ってたらごめんなさい、あなたひょっとして…フェイトさん？」

目的の商品を見つけ、音楽雑誌のコーナーを見ている時に声をかけられた。

振り向くと17〜8歳程と思われる女性が、穏やかな笑みを浮かべていた。

「…そうですね、どちら様ですか…？」

「ああ、ごめんなさい。

私はあなたの同級生、吉井明久の姉で玲あけいといいます。改めて、はじめまして」

……へ？

彼女が何を言っているのか一瞬理解できなかった。

「お姉さん…ですか？

明久…君の？」

確かに明久から両親と姉は海外にしていると聞いてはいたのだが…。私の母や桃子さんとまではいかないが、実年齢よりも若く見えてしまう。

それこそ私と同一年くらいといえる程に。

「あなたの事は、明久から聞いてるわ。」

明久達のために勉強会までやってくれたんでしょう…

愚弟のためにそこまでしてくれるなんて、何てお礼を言えばいいのか…」

「…お気になさらず。」

私が皆の為に思いついた事ですから…。

ところで、失礼ですけど…玲さんはお幾つですか？

まさか『17歳です』とか言いませんよね？」

私は軽い冗談のつもりで、彼女に歳を聞いてみた。

彼女は一瞬だけ躊躇ったがすぐにはっとして。

「…吉井玲、17歳と…2555日です」

『おい、おい！』

某声優がイベント出演時に必ずといっていい程言う、ツカミの決めゼリフ。

私だけでなく、やり取りが聞こえていた周りの人達もツツコんだ。

確かに玲さんの声は、その某声優に恐ろしくそっくりだけど。

玲さんと軽く雑談しながら店を出る。

…あ、明久の減点の理由を聞くの忘れた。

まあいいか、明久が本番で頑張ればいいだけだし。

一学期期末試験。

様々な思いを胸に秘めて、解答用紙に向かう私達。

10教科・5日間の日程はあっという間に過ぎた。

そして明久にとっては運命ともいえる答案の返却。
ちなみに文月高等部では、中間テストがない。

私はまあまあ出来だったが、気になるのは明久。
彼のところに行き、結果を聞かせてもらう。

…うん、どの教科も軒並み点数は上がって…えっ？
世界史が0点？

それで合計は…1062点だったのか。

私は彼に、どうして得意な科目だったはずの世界史が0点なのかを
聞いた。

そして彼のその答案を見て思わず呆れてしまった。

『受験者氏名

ダレイオス3世』

…確かこれって、問26の答えだよな。

私はもちろん正解しているのだが…。

…こんなおバカなケアレスマスのせいで、明久の独り暮らしは終わ
る事になったらしい。

ともかく、ようやく波乱の一学期が終わった。

といっても、夏休み入ってすぐに補習あるのだが。

私達Fクラスは試召戦争を頻繁に仕掛けたために通常授業が遅れて
いるのだと、シグナムが言っていた。

期末（後書き）

相変わらず拙い文ですね…すみません。

次回は肝試しか、海水浴となります。

猛暑（前書き）

肝試し編です。
今回は前編。

猛暑

7月下旬。

全国の小・中・高が地域による差こそあれど、一斉に夏休みとなるこの時期。

当然、我が文月学園も例外ではない。

ただ夏休みの始めには補習と夏期講習があり、私達は前者のため4日間の登校を言い渡された。

理由は度重なる試召戦争で授業が潰れて、その遅れを取り戻すためらしい。

私と瑞希は基礎点数が高く補習は必要ないと言われたのだが、自ら希望し補習を受けることに。

私は特別扱いが嫌いだからFクラスとして補習を受けたかった。

瑞希は：まあ明久と一緒にいたいという思惑が明らかに見てとれる。

補習は4日間あり、今日はその初日。

今年は空梅雨で10日しかまとともに降っていないが、今日は久々の大雨。

その影響なのか衣替えの時仕舞った、長袖ブラウスを引っ張り出さねばならないほど朝から肌寒い。

ただ気温は低いといっても29 あるため、はつきり言っただけかなり蒸し暑い。

これも温暖化によるヒートアイランドとかが関係しているのだろう：と、強引に自分を納得させた。

初日はもつとも遅れている数学がメイン。
監督官は勿論ヴィータ。

…この日は特に何事もなく補習を終えて、皆が足早に帰宅していた。

事件が起きたのは2日目の事だった。

この日はシグナムが監督官で、文系科目中心となっていた…のだが。

「あ…暑い…。」

昨日もかなりのものだったけど、今日はそれ以上に…何と云うのか
うだるような暑さだね…。」

昨日とはうって変わっての快晴。

気温もぐんぐん上がって、34 にもなっている。

朝10時でこの状態なのでまだまだ上がるだろうから余計に質が悪い。

「……………暑い」

あ、ムツツリーニが卓袱台に突っ伏してだれてる。

解らなくもないよ？

私ももう…ブラウスが汗でびっしょりだから。

ここはひとつ、彼を元気にする為一肌脱ぐとしよう…実際に脱ぐ訳
じゃないけどね。

私はムツツリーニの隣へと歩みより、彼が元気になる一言を耳打ち

した。

「…（ゴニョゴニョ）」

「……………！！！」

彼は飛び起きるといつものデジカメを素早く取り出し撮影ボタンを押しまくるのだった。

「…とてもいい画^えが撮れた」

彼が撮ったのは勿論、私の正面からの写真。

汗で濡れた上、第2ボタンまで外した私のブラウス姿である。

それはそれとして、明久がなぜか包帯姿でやって来たのだ。

私と秀吉がその理由を彼に聞いたところ…。

「あ、明久…一体どうしたのじゃ？」

「昨日帰ってから、どこかで怪我でもしたの？」

「いや…絶望しているのがバレて折檻を…」

「…は？」

秀吉はきょとんとしているが、私にはそれだけで原因が何なのか察知できた。

「…もしかして、玲さんがやったの？」

「…そうなんだよ」

「は、お主も色々大変じゃな…」

玲さんって見かけによらず暴力的なのかな？

「しかし…この暑さは深刻だよな」

雄二がぼやく。

「この暑さと、Fクラスの環境…まさに地獄といったところじゃな…」

秀吉ものつかる。

確かにこの暑さは尋常じゃない。

けど、手軽に涼を得る方法なんて…ここじゃ限られている。

そうこうしているうちに、瑞希が熱中症寸前に。
元々体があまり丈夫という訳じゃないからな…。

「瑞希さんっ!!」

倒れそうになった瑞希を、しっかりと抱える明久。

「…八神先生、瑞希さんを保健室に連れて行って構わないですよね
!」

「…仕方がないな。

では吉井、頼む」

「あ、俺も…」

「俺も」

「僕も…」

それに乗じ、不調を訴える振りをして教室を出ようとする男子達。
しかし、そんな事を見逃すほどシグナムは迂闊な人間ではない。

「お前ら、この期に乗じて脱走か!!」

「やべ、気づかれた!!」

雄二が一目散に、出口へと走る。

しかしシグナムよりも先に気づいていた私が、後ろのドアを塞ぐ。

「ダメだよ、補習なんだから脱走したりしちゃ。

少し…頭、冷やそっか」

…その時間中、シグナムが延々と説教をしていたのは言うまでもない。

「…しかし、こうも暑いとやる気が出ねえな。
なあ、何かいいアイデアは無いのか？」

またもぼやく雄二。

「そついった類いで、定番なのは怪談とかだけど」

私はそう言いかけ、ひとつ閃いた。

「…そうだ！

シグナム…じゃなくって、八神先生！

召喚フィールドを展開してくれますか？」

どうしてかは解らないけどその時の私には根拠の無い確信があった。

…シグナムが展開した召喚フィールドを使い、召喚獣を呼び出す事にした。

「それじゃ、最初は…」

明久、お願いできる？」

「…え、僕！？」

んー、いいけど…」

…サモン！！」

明久が最初に召喚。

するといつものデフォルメ明久ではなく、顔どころか体格までそっくりの明久が出てきた。

…兜を除いた全身鎧フルアーマーを着てはいるのだが。

「ほお、強そうじゃな」

「明久君の召喚獣、すごく格好いいです」

「…これが明久なのか？」

さすがにありえんだろ」

…などと口々に感想を述べていく。

しかし次の瞬間、我が目を疑う光景が。

『…きやああああつ！！』

瑞希と美波が悲鳴をあげたので、何事かと振り向くとそこには…。

「…………え…っ！？」

召喚獣の頭が取れて、床に転がっている！

その異様すぎる光景に私も思わず、悲鳴をあげそうになったが…ど

うにか寸前で堪えきった。

「これって…もしかして、デュラハンじゃない？」

デュラハンというのは伝承にある、首の無い鎧騎士の事だが…。
…なるほど、東西の妖怪・怪物の類いかもね。

「…大丈夫だよ、召喚者がフィールド外に出れば」

私は怯える瑞希をなだめ、明久にフィールドの外側へ出るよう促す。

「だったら、みんなはどうなのかな？
召喚してみてよ」

明久の一言で、召喚獣披露大会と化すFクラス。
まずは秀吉。

「…サモン!!」

…いつもにも増して女顔で、手を小さく丸めた召喚獣が出現。
しかも頭には動物、というよりも猫のような耳が。

「…猫又、か…。
それにしても、すごく可愛いね」

明久の率直な感想。
しかし彼にとっては…。

「その様な事を言われても嬉しくないのじゃが!？」

頬を膨らませる秀吉が妙に可愛すぎる。
そんなリアクションを取るから女の子だって思われるんだよ、きつと。

猫又は 神転生など多くの作品で、可愛い少女の姿で描かれている。

召喚獣というのは召喚者の特徴を継承しているらしいので、秀吉は可愛いという結論なのだろう。

「次は俺だ、サモン!!」

雄二が意気込んで召喚。

しかし現れたのは、上半身裸だという事以外は本人と変わらない姿だった。

「何だ、俺には影響なし…ってか？」

「さすが雄二、除外されるなんて色々な意味でやるね…一つしかないけど」

「目指せW杯!!」

（ドッ、ガコンッ!!）

「ぐはぁっ!?!」

明久の迂闊な一言で、床に転がってる明久の召喚獣の頭をゴミ箱へシュートする雄二。

「ひどい、蹴ったね!?!」

人の召喚獣の頭をサッカーボールみたいに!!」

「昔からよく言うたる。

『友達はボール』って」

「それ言うなら『ボールは友達』だからね!?!」

逆にしたら、ただのいじめだから!!」

いつもの漫才に呆れる私達だったが、ここで雄二の召喚獣に異変が。

「…雄二、召喚獣の様子が変だよ？
…って、これは…!」

私の指摘でみんなが雄二の召喚獣に注目したかと思うと、召喚獣の姿が突然激変した。

体は体毛で覆われ、人間と同じ頭部は獣のそれと変化している。

「なるほどね…」

ウェアウルフ

狼男って事が…さしずめ、野性味の象徴って感じかな？

変身した理由は、おそらくさっきの『友達はボール』かもしれないね…」

アナリスト

専門分析家のように、冷静に判断する私。

「……………サモン」

続いてはムツリーニ。

出てきたのは…。

本人よりも青白い顔、全身黒系の衣装。

牙のように異常に発達した八重歯からすると、これはやっぱり…。

ヴァンパイア

「吸血鬼だね」

「事あるごとに血を欲しているからってか？」

「女好きって意味なのかもしれないわね」

「……！！（ブンブン）」

私の一言に相槌を打つ雄二と美波、全力否定しようとするムツツリ
ー二。

「次は、瑞希あたりいつてみようか？」

「ええ！？」

…どうしても、やらなきゃダメですか？」

意外と往生際が悪いな。

「当然。」

自分だけ逃げようったってそうはいかないよ？」

「うう…わかりました。」

では…サモンです！」

『…ボンッ』

（サキユバス登場）

「きゃああああっ！？」

「あべしっ！？」

召喚獣が現れた途端、明久（本人の方）の頭を素早く掴んで90度
横へと強引に向ける瑞希。

瑞希の強襲？に謎の悲鳴をあげる明久。

美波が召喚獣と瑞希本人を交互に睨み付けているが…あえて流す事
にした。

半泣きになっている瑞希をなだめて召喚獣を消させる一方で、今度

は美波に召喚させる。

「…サモン!!」

出てきたのは…巨大な石の体を持ち、相手に倒れ込み石にしてしまう日本の妖怪塗り壁だった。

…ダメだ、今笑えばたとえ私でも殴られる。

勿論、全力全壊で。

「…ねえアキ、この召喚獣私に何を言いたいのかしらね…?」

「た…たぶんとっても固いつて事じゃ無いかな、特に胸の辺りぎやああ!!」

「…ふんっ!!」

明久の失言に関節技を容赦なく極める美波。

地雷だとわかって踏みに行くなんて、明久も本当に懲りないよね。

「…最後はフェイトちゃんですね。

クラス全員がやったんですから、やらなきゃダメですよ?」

瑞希に促されるまでもなく私は召喚のため意識を集中させる。

ちなみに私達以外のクラス生徒達はみんな、バオの敵キャラみたいな感じの…早い話がゾンビだった。

勿論瑞希は恐がり、美波が強制的に引っ込めさせたのだが。

「…サモンっ!!」

召喚結界から現れたのは、私と同じく金髪灼眼の少女だった。服装は、黒いチャイナ風のインナーに赤いジャケットを着ている。

まるで九尾狐のような独特のポニーテール、右手にはなぜか拳銃で左手には錫杖。^{しやくじょう}

「わあ、とっても可愛いですねえ〜！」

「でもこれ、妖怪なの？」

「とてもそんな風に見えないけど…」

するとという訳か、突然シグナムが割り込んだ。

「そ、そいつは…！！」

驚愕の表情のシグナム。

どうやらこの召喚獣の事を何か知っているようだ。

「…こいつがハラオウンの今の召喚獣か？」

なるほどな…ハラオウンは一般的ではない知識にも、異常に詳しいからな。

平たく言えばマニアックという事だ。

こいつには、ヤオウという歴とした名がある。

見た目こそ可憐な少女だが何と765歳の、狐の妖怪『妖狐』という種族。

それも、妖狐属の上に立つ『仙狐』という存在だ」

シグナム…詳しすぎ。

彼女の『解説』にみんながドン引きしたところで。

「でも、本当に可愛らしいですよね。

秀吉君の召喚獣に、負けてないですよ。

思わず『お持ち帰り』とか言いたくなってしまうほどですね」

お持ち帰り云々はともかく瑞希の意見に、異を唱える者はいない。

「…とにかく、こうなった原因を突き止めよう。

責任者に聴取して、ね」

「ババアのところに行くんだな？」

そう、文月学園現場責任者にして試験召喚システムの管理責任者…。
藤堂カヲル学園長に、話を聞かねばならない。

代表して私と雄二と明久の3人で学園長室へ。

「…おや、雁首揃えて一体どうしたってんだい？」

「それはこちらの台詞だと思えますけど？」

ダラダラと長話するのは好きではないので、簡潔に用件だけ言いますね。

どうして、召喚獣がこんな妖怪とか怪物みたいな姿になっているんですか？」

すると、学園長は眉ひとつ動かさずに言った。

「…そりゃ勿論、あんたら生徒のためさ。

いいかい、今は夏真つ盛りだ…こんな時期の定番、と言えば何がある？」

水泳なんかもそうだがね、やっぱり怪談は外せないと思わないかい？
それにあんたらも知ってる通り、召喚システムは先端技術だけで成り立っている訳じゃないんだよ」

つまり、学園長が言いたいのは…。

「つまりババア長は認める訳にいかない、と。オカルト部分の調整に失敗したってな」

「往生際が悪いですよ。」

ババア長」

「二人共、バ…じゃなくて学園長に失礼だよ！」

顔を引きつらせて、呆れの溜め息をつく学園長。

「相変わらず目上に対する礼儀つてのを知らないクソジャリ共だね。あとハラオウン、あんたもつられるんじゃないよ」

雄二がその嫌味をさらりと受け流して発言。

「まあ、そういう事にしておいてやるか。」

せいぜい、学園長の有難い温情を受け取るうぜ。

…ただし、それにや条件があるけどな」

不敵な笑みの雄二。

「…肝試しも、夏の定番のひとつだよな。」

それに召喚システムを利用するのさ、これなら立派な課外授業だろ？
幸い、手伝ってくれそうな奴らもいる事だしな」

手伝ってくれそうな奴らというのはおそらく、さっき揉めた3年の常夏コンビの事かな？

実は先程突然彼らに因縁をつけられたのだ。
もっとも雄二の舌先三寸で撃退したのだが。

「…ただの肝試しなら却下さね」

「んじゃチェックポイントをいくつか設定してそこを通らせるか。途中悲鳴をあげたらアウトってルールにしてな」

そして、補習と夏期講習の後半は急遽2・3年合同の肝試し大会が行われる事になった。

3日目はその準備のために充てられたのだった。

猛暑（後書き）

今回も、要所にネタが散乱してます。

次回は肝試し後編の予定。

激昂（前書き）

ようやくと書けました。

激昂

『ここの暗幕は！？』

『配置はこれでいいの！？』

…学園長と交渉した結果、合同肝試しをやる事が私達2年と3年に伝えられた。

新校舎の3階と4階を使い長めの本格的なものを作るらしい。

補習と夏期講習の3日目は必要な資材の搬入や通路の設定など、準備に充てる事になった。

元々文月の生徒は騒ぎ好きばかりなので、反対する者はほとんどいない。

退屈な授業よりもこうしてみんなで楽しみたいというのが本音だろう。

さて、今回の合同肝試しはもちろん一般的なものとは異なる。

ここは文月学園…試験召喚システムを用いて、特殊なトラップを多数仕掛けられるのだ。

大まかな準備は私達2年もやるが、細部は全て3年がやっている。

というのも、今回は私達が挑戦者側なのだ。

3年は脅かす方…つまり、仕掛人側となる。

…というのも今回の件は、常夏コンビが私達と揉めた事が原因。

召喚獣の変化に騒いでいた私達に、因縁をつけて来たのだ。

3年は原則的に全員参加の夏期講習をサボって校舎をうるついでい

たくせに。

結局は私達が学園長と交渉してもぎ取ったイベントにのってきて、肝試し対決となったのだ。

今回のイベントのルールを説明しよう。

まず、私達挑戦者側は2人一組となり予め設定されたコースを進む。途中幾つか設けられているチェックポイントで通過を証明する判をもらう。

そして、一組でも最後までクリアできれば挑戦者側の勝利。

途中、片方でも一定以上の大きさの音を出せばそこで両者失格となり再度挑戦はできない。

挑戦者側はペンダント型の計測器を持たされ、それが90デシベルを超えた時点で失格。

最後まで突破できずに全員失格となったら、向こうの勝ちとなる。

ちなみに2人一組であれば何組でも同時に挑戦可能、組み合わせは自由。

「…しかし、夏期講習や補習の後半を潰してくれるなんてな。ババアも心憎い計らいしてくれるよな」

「そうだね…しかも出来がよければ一般公開もするんだって」

そう…私達の頑張りでこのイベントが評価されれば、清涼祭のように一般へ解放するらしい。

いやが上にも気合が入るといふもの。

ちなみに、ムツツリー二を含む一部生徒は計測器での判定をするため待機。

本番では2年と3年の、約600人がふたつの陣営に分かれる訳だが…挑戦者と仕掛人の比率は3：1ほどかな。

そんな事を言っている間も準備は着々と進む。

結局、諸々の準備で丸一日かかってしまった。

夏期講習・補習最終日。

試召システムの不調と常夏コンビの因縁から始まった合同肝試し大会。

清涼祭の時と違い、複数のクラスが合同でやっているため無駄に本格的なものが出来上がった。

400人を超える攻撃側である私達。

迎え撃つは、約150人の仕掛人達。

肝試しやお化け屋敷の性質上、数的な有利不利は全く無いと言っていい。

「さてと…向こうがどんな手を使ってくるか探らないと、攻略のしようがないと思うな。」

取り合えずこちら側に協力してくれた3年生に斥候をお願いしたけど…」

「過度の期待はしない方がいいな。」

誰にだって怖えもんは一つ二つ持つてるからな。」

…んで、お前は誰とペアを組むんだ？」

話し合う私と雄二。

そう…私はまだ、誰と挑むのか決めていない。

決まっていなのは、私を含めて4人。

他3人はなのは…はやて・瑞希。

瑞希は明久と組みたかったようだが美波が少々強引に組んだのであぶれたという訳だ。

「それじゃ…私はなのはと組むよ。」

はやて、瑞希の事をお願いできるかな？」

「ん、任しとき！」

フェイトちゃんこそなのはちゃんの事しっかり守るんやで？」

ウィンクしながら、右手でサムズアップのはやて。

一体私に何を期待しているのだろう？

そうしている間にも、斥候部隊がチェックポイントに到達していた。そこで待ち構えていたのは3年生・小暮葵。

妖艶なプロポーションで、男子の人气が高いとか。

小暮先輩はこちら側の男子数名と二・三言葉を交わし突然制服を脱ぎ捨てた。

私、新体操部にも所属しているの

「……おおおおつ！？」

レオタード姿になった小暮先輩に、男子一同は思わず歓声をあげてしまう。

当然計測値は90を超え、この瞬間10数名が失格となった。

しかもその情報が待機中の私達にもたらされた瞬間、他の男子数十名も我先にと挑戦していった。

『うおおおーっ！！』

新体操——つ！！！！！！

……バカばっか。

別に駄洒落じゃないよ？

ある意味ネタだけど。

向こうの思惑通り、ここで50名くらいの男子が脱落した。

「……やられた、かな。」

深層心理を逆手にとった、高度な手だね。

まあ……後続の瑞希とはやてにはさすがに効果がないと思うけど」

その予想通り最初の関門を難なく突破する、はやてと瑞希。

怖がる瑞希を励ましながらいくはやて。

ちなみに、失格になりさえしなければ途中で戻っても構わないルール

ル。

なので第1CPを通過した時に、一旦戻って来るよう指示していた。

「いや、けっこー本気で脅かしに来とるなあ。

瑞希ちゃんがもう怖がって悲鳴あげさせんようにするだけで手一杯や……」

やはり不安は的中したようだ……このままではいつ悲鳴あげて失格になるか。

……次は明久と美波に行かせようと思っているのだが、美波も瑞希ほどではないが怖がっているようだ。

先程から明久のYシャツの肩口をギュツと握り続けている。

……こんな状態が『彼女』に知られたら一体どうなってしまうのか、考えただけで恐ろしい。

今はAクラスの久保くんと共に挑戦中なので、何とか無事ではあるが……。

噂をすれば丁度『彼女』……Eクラス・清水美春が黒いオーラを纏いながら通路を進む様子が映された。

『お姉様……お姉様……!!』

オネエ……サマ……!!』

バサカ
狂戦士と呼ぶにふさわしい威圧感を纏いながら『お姉様』こと美波を捜す美春。

彼女は筋金入りの同性愛者で、美波に近づく者は同性だろうと全て敵視しているほど。

その徹底ぶりは私や瑞希が会話しているだけでも嫉妬するというく

らいだ。

同行している久保くんも、彼女の雰囲気圧倒されてしまっている。そんな彼女でも、辛うじて恐怖心は残っていたようである。それは第2CPでの事。

待ち構えていたのは…常夏コンビの坊主頭の方、夏川先輩だった。

彼はただ、その場に佇んでいた…それだけならばまだいい。

彼のその異常性に美春達や私達が気づくのに、さほど時間はかからなかった。

『…きやあああつ…!!』

『…うわあああつ…!!』

二人の悲鳴がハモリ、計測音量があつさりと100を超えた。

映像越しにその様子を見ていた私達も、多くが悲鳴をあげてしまう。…もちろん、私も。

待機中は失格にならないというのがせめてもの救いといったところか。

彼の格好は黒を基調に白い縁取りの、フリルが全体に施された女性用の服。

…ヴィータの召喚獣が着ているような『ゴスロリ』と呼ばれる系統の服だ。

いや…ヴィータの召喚獣の方がフリルが少なく、まだマシと言える。

それほどまでに彼の格好は常軌を逸しており、その分恐怖を煽っているのも事実ではあるが…。

はつきり言って小さな子供には絶対に見せられない、ある種の生物兵器といえる存在。

二人が憔悴しきった表情で戻ってきた。

美春は、美波が明久の側にいる事に意外にも抗議しなかった。

いつもの覇気がない、魂が抜けたような顔をしていたのだった。

時々譫言のように『黒ゴス怖い、黒ゴス怖い…！』と呟いていた。

誰も立とうとしないので、私となのはのペアが向かう事にした。

「フェイトちゃん、本当に大丈夫なの…？」

あれを生で見ちゃったら、絶対耐えられないと思うんだけど…」

なのはは、不安げな表情を隠そうともしない。

私はそんな彼女に、優しく力強い微笑みを見せる。

「大丈夫だよ、なのはは私が怯えさせないから。

何があっても、口はきつく閉じていてね？」

「…うん。

私はフェイトちゃんの事を信じるよ。

だから、今回の対決は絶対勝とうね…／／／／／」

頬を染めながら、なのはが私に身を預けてきた。

私は、なのはの体を優しく抱き寄せて安心させる。

しかも『髪をなでなで』がついた疑似母娘コース。

「…落ち着いた？」

「…ん、ありがとう。」

大分楽になったよ」

私達も第2CPに着いて、その悪夢を目にする。

『……………ッ！！』それは、私達が今まで見てきたどんなものよりも醜悪だった。

坊主頭の男がフリル全開のゴスロリ服を着ている。

言うのは簡単だが想像してみたい…それが一体、どれだけ気持ち悪いのか。

はつきり言って、大人でもトラウマになりそうなほどドギツイ光景だ。

言い忘れていたがCPでは試召戦争と同じように召喚対決を行う。ただ今回に限り補充試験や補習は無い。

その代わり失格にならない限り何度でも即座に復帰が可能だ。

もちろんペナルティとして一度本拠まで戻らなければならないのだが。

『サモン！！』

…ちなみに、召喚対決中は失格にならない。
『サモン試召

試召』の掛け声も然り。

総合科目

3年Aクラス

夏川俊平

2159点

2年Bクラス

高町なのは

1944点

2年Fクラス

フェイト・ハラオウン

6471点

「なん…だと…!？」

彼はなのはよりも、むしろ私に驚いている。

無理もないか…教師ですらなかなか取れない高得点、6000点超えを記録しているとあっては。

しかも、それがFクラスの所属なら尚更。

「そうか…お前か、奴らの『切り札』ってのは」

Aクラスとの試召戦争以来私達Fクラスの噂があつという間に広がった。

『Fクラスには一騎当千の女^{つわもの}が存在するらしい』…と。

「あ、私は戦いません。

点差が開きすぎてますからね、そちらもその方がいいでしょう?」

実に相手の3倍とあってはどうやったって負ける事ができないだろう。

「…まあ、そんなら勝負になるな。
確か…高町だったか？」

お前に恨みはねえがこれも行き掛かり上ってやつか、手加減しねえぜ！」

夏川の召喚獣は『馬頭』…西遊記に出てくる、中国の妖怪だったかな？

この分なら、片割れである常村の方は牛頭だろう。

一方なのはの召喚獣は背に大きな羽根を生やした少女である。
しかしその色は白黒…形も白は天使、黒は悪魔のそれである。
形容するなら『堕天使』といえるその佇まい。

「堕天使・ルシファーか…こういうのもある意味有りなのかな？」

今のは私ではなくなのはの感想。

ルシファーが象徴するのは恐らく『二面性』。
悪魔でありながら、天使の羽根を持った『堕天使』という存在。
元々天使だったと言われているらしいが…。

天使のように穏やかである普段の顔の中に、まさしく悪魔と呼べる
恐ろしさをも内包するなのは。

事実『海鳴の白い悪魔』と呼ばれているしね。

…誰が呼び始めたかまでは知らないけど。

「…つく、油断した！」

まさか、点数低い奴に負けちゃうなんてよ！」

夏川俊平

0点

高町なのは

251点

戦いは、なのはが先の先を取りつつカウンターで翻弄していった。

なのはは御神流剣術道場の娘…兄の恭也や姉の美由紀と同じく、御神流・小太刀二刀の使い手。

見切りもかなりのもの。

しかも高町家は、桃子さん以外みんな格闘系の技術が高く『戦闘民族高町家』と呼ばれているとか…。

そんなこんなで、どうにかある意味では最大の驚異を退けた私達。一旦戻って、はやて達なり明久達なりに交代しようと思ったのだ。

「お、お疲れさん。

さすがにもうあれを超えるものはねえと思うが…」

「そうだね…。

今度は、はやてちゃん達に行ってもらおうよ。後から僕達がいくから」

「ん…何や、釈然とせんけど…まあええわ。ほんなら瑞希ちゃん、もうちょい頑張るか」

「あ…はい…」

瑞希を連れて再び挑戦するはやて。

はやてと瑞希は先程と同じように、第2CPから先も順調に進んでいく。

途中、私達や明久達と交代しながらゴールを目指してひたすら進む。

ここまで進んできて、私はこの仕掛けの質が公開にも十分耐えうると感じた。

それどころか、並のお化け屋敷を凌駕するのではないかに思えた。

そうこうしているうちに、はやて達が最終CPへ到達した。

待ち構えていたのはやはり常夏コンビ。

ちなみに、夏川は既に服を着替えていた。

あのまま再登場されたら、さすがに色んな意味で心が折れるだろう…。

「八神、何でテメエはあのバカ共に手を貸す？」

同学年っただけでそんなに協力する義理はねえんじゃないのか」

「生憎やけど、Fクラスは大親友…フェイトちゃんがおるんや。

なのはちゃんと同じように私も彼女の敵には回れん…それだけや」

はやては常村の指摘を鼻で笑う。

しかし、常夏コンビによるFクラスへの罵倒は止まる気配がない。

そして…ついにははやて達がキレた。

『…何て事を言うんですか（や）！！』

二人の怒鳴り声は凄まじいまでに良く通った。

「…あなた方から見れば、落ちこぼれかもしれませんが！

Fクラスのみんなはそれを補えるものを、沢山持っているんです！」

「…瑞希ちゃんの言う通りや、試験の成績だけが人を計る物差しやない！」

私らからすればあんたの方が逆に余計落ちこぼれに見えるで！？」

再三にわたるFクラスへの罵倒で激昂した二人。

反論はいいけど、二人とも失格になってしまった。

まあ仕方ないな…あれだけ好き勝手言われてなお我慢できる人間がいたら、逆に見てみたい。

「…ごめんな、安い挑発に乗せられてもうて」

「何、気にすんな。」

俺だったら、殴りかかっていただろうしな」

謝罪するはやてを、雄二が慰める。

翔子がいたのだがさすがに何も言わなかった。

「…雄二、いいかな？」

最後は、私となのはに決めさせて欲しいんだ。

彼らと『O H A N A S H I』したいしね…」

「ん、ああ…。」

それは一向に構わねえが、あまり苛めてやるなよ」

「大丈夫…ちよつとだけ、きついお灸を据えてあげるだけだから」

なのはも、常夏コンビへの怒りからか恐怖心が消えたようだった。

…常夏コンビは『悪魔』と『死神』の逆鱗にも触れたのだった…。

最終CPへ到達した、私となのは。

「…お二方、早速で悪いと思いますが（召喚獣には）死んで頂きます。」

戦うのは私一人でも十分…そちらは、2人がかりでも構いませんよ」

総合科目

3年Aクラス

常村勇作

2207点

夏川俊平

2159点

2年Fクラス

フェイト・ハラオウン

6471点

今回は特別ルールなので、本拠に戻った時点で点数が元通りになる。

「オーバードライブ！

真ソニックムーヴ！！」

私の召喚獣が使える、特殊スキルの一つ『真ソニックムーヴ』。

受ける点数ダメージが倍になる代わりに、スピードと攻撃力が3倍になる。

消費する点数は単科目だと300、総合で1800と高いのでおいそれとは使えないが。

フェイト・ハラOWN

4671点

「姿こそ違えど、力は全く変わらない。

その身に刻め、防ぐ事すら敵わぬ閃撃の極致！」

私の召喚獣が相手の間合いに飛び込み、強烈な斬撃を放つ。
ちなみに錫杖は仕込み刀になっている。

閃光の如き『迅さ』で敵の攻撃を嘲笑うようにいなしつつ、2体を
浮かせ神速の連撃を叩き込んでいく。

この攻撃は、わざと威力を抑えて手数をもくしているのだ。
そのため50ヒット以上を軽くマークする。

「何だよこの『ずっと俺のターン』的な展開は!？」

圧倒的な技量差の前に為す術のない常夏コンビ。
点数がみるみる減っていきついには…

常村勇作

0点

夏川俊平

0点

フェイト・ハラOWN

3871点

とうとう私一人だけで常夏コンビを倒した。

この瞬間に、合同肝試しは挑戦者側…私達2年の勝利となった。

肝試し終了後、常夏コンビ2人がFクラスに謝罪しに来た。
…というより、謝罪させたのだが。
常夏コンビとの戦いはまだ今後も続きそうだ。

私はその後、学園長に一つお願いをしにいった。

「…その召喚獣がそんなに気に入ったのかい？
まあ、見た目怖くないからいいけどねえ…」

「え…むしろ、可愛いじゃないですか。

ヤオ ウですよ？」

私の発言に苦笑する、藤堂学園長。

「…そんじゃ、夏休み一杯まではそれで構わないって言うんだね？」

「はい、お願いします」

「わかった…けど、できる限り学外の人間にバレないようにするんだよ。

つても、あんたなら大丈夫だと思うけどさ」

かくして、夏休み一杯私の召喚獣が仙狐 ヤオ ウになった。

しかも召喚フィールド展開不要、点数消費もなし。

なら何故そんな事をしたのかというと…単純に私が、召喚獣を愛でたいから。

私だって女だから、可愛いものに心を動かされるのは当然な訳で。

4日間の夏期講習がやっと終わった。

途中から異様に長く感じたのは、多分気のせい。

ちなみに組んだセットは、次の土日に2日間限定での公開となった。海鳴だけでなく県外からも噂を聞き付けた人達で盛況だった。

今度は、私達2年も脅かす側を演じている。

無駄に気合いの入った演出でリタイアが続出、怖さは他のどのお化け屋敷よりも上と言われたとか。

文月学園高等部はある意味で、新たな伝説を作ったのだった…。

くおまけく

「…最後に二人を倒す時のフェイトちゃん、とってもカッコ良かったよ。」

やっぱりフェイトちゃんはああでなきゃね♪」

合同肝試しの後、なのはの家に寄った私。

お目当てはもちろん、翠屋自慢のスイーツ。

中でもシュークリームは、大手の菓子メーカーが全国展開の交渉に来るほど。

「なのは…それ全く褒めてない気がするよ?」

…私は、わざとらしく頬を膨らませる。

「えへへ…ごめんね。」

でも…それだけ、フェイトちゃんの事を信頼してるんだよ。

私は『カッコいいフェイトちゃん』が、昔から大好きなんだよ?」

言いながら、その顔を私に近づけるのは。
彼女の小さな呼吸音が私の耳に届く。

さらになのはは、いきなり私の頬を舐めてきた。

「…ひやつ!？」

い、いきなり何を…!？」

「んー？」

クリームがほんの少し頬についてたからね。

それに…フェイトちゃんの方も『オイシイ』よ？」

なのはは、いつもこうして悪戯っぽい笑みを浮かべて私をからかっている。

「今日も『して』くれないのかなあ…？」

「……………ッ!！」

なのはの一言に口へ含んでいた紅茶を不用意に飲んでしまい、咳き込む私。

「な…何がっ!？」

「私の『初めて』を奪っておいで、そんな事を言うんだ…？」

「『初めて』って…！」

何でそんな卑猥な言い方をするの!？」

「『初めて』に変わりないよ…小学生の時とはいえ、あんな事を…
ねえ？」

私のファーストキスだったのにね…」

R18な展開を想像した人は、後でO H A N A S H Iしまし
ようね。

「あ、あれは…！」

なのはの方からしてきたんでしょ！？」

「そうだっけ…忘れちゃったよ？」

士郎さん、桃子さん…。

あなた方の次女はこんなに性悪な性格だと、気づいていますか？

部屋の角に追いやられて、逃げ場なくなる私。

「ふふ…逃がさないよ」

なのはの顔が段々近づいてきて…。

『…ん…っ…』

私達はある意味どんな甘味よりも、とても甘い口づけを交わす。

…あの時と、同じだ。

なのはの方から迫ってきて私の口を蹂躪する。

しかも以前より格段に巧くなっている…このままでは『イカされて』しまう。

…と思った刹那、なのはが自分から離れていく。

「…今日はこの辺でやめておくよ、フェイトちゃんに嫌われたいし。」

でも…時々、今みたいに『させて』…ね？」

艶かしい笑みを浮かべて、弄るのをやめたなのは。

つ…疲れるなあ…。

何で私…もっと強く、拒まないんだろう？

親友でもやっっちゃいけない事くらいは、なのはだって解ってるはずなのに。

激昂（後書き）

大スランプです…。

相変わらず、何を書きたいのかわからない。

次は…海水浴と夏祭りでも入れようかな？

風物（前書き）

グダグダです…。

海水浴・夏祭り編。

もっとそれぞれのセリフを増やしたかったですが。

風物

「フエイト、お友達と遊ぶ予定とかは無いの？」

きっかけは、母リンディのこの一言だった。

夏期講習の後、課題を片しながらそれなりに夏休みを過ごしていた
7月末。

大量に作りすぎてしまった素麺と格闘しながら、母が私に尋ねたの
だ。

「んー、今のところは未定かな。」

2学期は試召戦争が激しくなるだろうし、イベント…体育祭も控えて
る。

諸々を考えれば、私達に…Fクラスに余暇は実質無いようなものだ
から」

食べながらも、話を進める私。

「…しかし、折角の夏休みなんだから少しは楽しんだ方がいいと思
うぞ。」

こんなに長期間休めるのは学校に通ってるうちだけだからな。

明後日からは祭りもある…この機会に、クラスの皆と存分に羽を伸
ばしてみたらどうだ？」

兄・クロノがわざわざ箸を止めてまで私に言う。

更にはエイミィやアルフも加わり、私は仕方なく課題消化のペース
を落とすよう約束させられた。

ちなみに例の素麺を、7人でも食べきれなかったのは余談である。

「そう、そんな事があったのね…」

喫茶翠屋。

昔からの…といってもまだ一回りくらいだが、馴染みであるこの店作業しながらも私の相手をしているのは、なのはの母でもあるパティシエールの桃子さん。
丁度なのはが出掛けているというので、店で待たせてもらっているのだ。

「まあ、クロノ君達の言う事も間違いじゃないわ。
学生のうちはこのように時に思いつき遊んどいた方が逆にいいのよ。
もちろん課題をこなすのも重要ではあるけどね」

私はアイスコーヒーを飲みながら桃子さんの話に耳を傾けていた。

「フェイトちゃん海水浴とか興味ないの？」

「あるにはあるんですけど行った事は無いですね」

「なら、クラスの友達とか誘って見たら？」

「丁度なのはも『フェイトちゃん達と、どこか遊びにいきたい』ってぼやいてたから」

「…えっ？」

思わず目を丸くする私。

が、すぐ表情を戻す。

「…わかりました。
少し考えてみます」

その日の夜、知人友人達に片っ端から連絡して誘ってみた。
文月の級友は言つに及ばず聖祥学園の友人もだ。

…何人が断られると思っていたのだが、予想に反して軒並み参加となった。

不参加は、秀吉の姉・優子唯一人。

…皆、そんなに暇だったのだろうか？

『平成の大合併』により、海鳴市も周囲の市町村との合併を実行。
隣の大潮町を入れた事で、観光による経済効果が期待できるようになった。

それはさておき、海水浴や夏祭りのための準備をしておかなければならない。

私は隣の遠見市にある大型店舗へ足を運んで、水着と浴衣を選ぶ事にした。

え、デザイン？

それはお楽しみで。

2日後。

私は海鳴市（旧大潮町）の海岸付近にいた。

目的は…そう、真夏で海といえば海水浴しかない。

ただ参加してるのが30人と多く、4台に分乗せざるを得なかったが。

私達が訪れた大潮海水浴場は日本初の海水浴場が誕生した頃から営業している、歴史のある場所。

かつては公営だったが今は民営化している。

…さて、前置きが長引いてしまったね。

現着した私達を待っていたのは、既に人が集まり始めている海水浴場だった。

取りあえず、海の家に併設されている更衣室に向かう私達。

各々が用意してきた水着に着替える。

私も含め、みんな気合いを入れて新調したのが本当によく分かる…そんな感じの水着だった。

「…フェイト達の知り合いって、みんなスタイルいいのねえ…」

美波が、恨みがましく言い放つ。

一部を除けば、みんな二次性徴を迎えたか終えているから…確かにそう言えるのかも。

「いや、早いところ着替えましょうよ…待ってる人達もいるんですし

「！」

強気そうなツインテールの少女が周りの迷惑になると私達を促す。

可能な限り手早く着替え、更衣室をあとにする。

さつさと着替えを済ませた男性陣は、パラソルなどを手早く準備し私達を待っていたのだった。

「みんな遅いね…」

「女性の着替えは得てして時間がかかるものです。

ここは、気長に待つとするのが正しいでしょう」

明久の呟きに相槌を打った初老の男性・鮫島。

それだけで「できる男」とわかるオーラを放っているナイスミドル。

「…みんなお待ちせ！」

なのはの声に振り向く男達7人。

そこには23人も的美女・美少女・美幼女達が、眩いばかりの水着姿を披露していた。

その中にはもちろん、私もいる。

その楽園のような光景に、周りの視線も釘付け。

男7人に女23人と、若干異様な気もするが…敢えて気にしない方向で。

今回参加してるのは以下の30名。

高町なのは

フェイト・ハラオウン

八神はやて

アリサ・バニングス

月村すずか

エイミー・ハラオウン

カレル・ハラオウン

リエラ・ハラオウン

アルフ・ハラオウン

八神シグナム

八神ヴィータ

八神シャマル

ノエル・キドウ

ファリン・キドウ

鮫島

中島昴

中島銀河

ティアナ・ランスタ―

エリオ・モンディアル

キャロル・ルーシェ

高町ヴィヴィオ

吉井明久

吉井玲

坂本雄二

土屋康太

木下秀吉

姫路瑞希
島田美波
島田葉月
霧島翔子

運転は玲さんとシグナム、エイミィと鮫島さん。

レンタカーで定員数の多いセナやフードを借りてうまく30人を乗せた…という訳。

近場だからそれほど荷物は要らなかった…というのも一因ではあるが。

遠出だったら間違いなく、もう一台はないと行けないだろうから…。

「文月のみんなは聖祥組と会ったの初めてだよな？」

私達3人が中学まで通っていた聖祥学園の友達とその後輩達だよ。あとその身内もいるね」

アリサ達聖祥組と、明久達文月組が簡単な自己紹介を交わす。

「それにしても…私達って凄い注目されてるわね。色んな意味で…」

アリサが溜め息をつきつつ呆れ気味に言う。

美女・美少女達が23人も同じグループなのだ。

TVの口ケでもあるのかと誤解されても、おかしくはない。

…先程から女性陣がナンパされまくっているが、その度に浜辺の男達はあえなく撃沈する。

ある者はティアナの冷徹な一言で両断され、ある者は中島姉妹の体術の餌食。

シグナムに至ってはどこに持っていたのか、スポーツチャンバラ用の刀で一本を取れたら…なんていう始末だ。

もちろん達人でもない限りシグナムから一本を取れるはずもない。

そんな訳で私達は、大したトラブルもなく真夏の海を満喫できた。

私やすずかなど運動得意組は、草ビーチバレー大会に飛び入り参加。不得意組と幼年組はスイカ割りなどで楽しんだ。

ちなみに大会はプロ選手がいて、私とすずかのペアも対戦したが…僅差で敗れたのだった。

ああ、私達が着てた水着のデザイン…やはり気になるよね？
さすがに23人全員って訳にはいかないけど…。

フェイト
私

群青のビキニタイプ

なのは

桜色のリボンビキニ

はやて

ストライプビキニ

シグナム

青紫のハイレグ

ヴィータ

赤系のワンピースタイプ

シヤマル

薄緑のパレオタイプ

昴

デニムのホットパンツ風に青いビキニの上
ティアナ
黄色系のハイレグワンピ

：他のメンバーは皆さんの想像にお任せします。
ただ、非常識なチョイスという訳ではありません。

あつという間に夕闇が迫る時間となった。
今日から数日は、夜にまた違った顔を見せる。

旧・大潮町時代からやっている『潮祭り』だ。
他の夏祭りとは大差はないが旧海鳴の夏祭りより人出が多く、今や関
東でも屈指の祭りになった。

私達は民宿に戻り、浴衣に着替える。
男性陣はシャツにズボンのラフな私服だが。

着付けはノエルさんが指導してくれた。
このくらいはできないと、月村のメイドは務まらないらしい。
ちなみにそのノエルさんも当然浴衣姿。
彼女や私みたいに外国人が浴衣を着ると妙に色っぽく見えるらしい
…。

「えへへっ」
なのはママ、似合う?」

ヴィヴィオが、トコトコと近寄りなのはにこんな事を言う。
もちろん、事情を知らない文月組は固まる。

「『ママ』って…？」

なのは、その歳でまさかの子持ちな訳!？」

何故か美波が詰め寄る。

「ち、違うよ!？」

この子…ヴィヴィオは遠い親戚の子で、訳あって高町家で引き取ったの!

も…ヴィヴィオ、人前で『ママ』って呼んじゃダメだって言ったよね!？」

しかしヴィヴィオはそんななのはの様子など全く意に介していないようだ。

そんなヴィヴィオに呆れたなのはは苦笑する。

そんな一幕もありながら、浴衣に着替える私達。

ちなみに全てリースで料金全額月村家が負担。

すずかとアリサ…月村家とバニングス家は海鳴、いや日本屈指の資産家。

アースラググループとも友好関係にある家系なのだ。

ちなみに浴衣は私達3人が代表してお見せする。

なのは

白地に撫子
フエイト

私

黒地に芒
すすき

はやて

群青地に紫の朝顔。

帳が降り始めた夕方6時、私達は幾つかのグループに分かれて祭りを楽しむ事になった。

私はなのは達聖祥元5人組で、明久達は文月組。
シグナム達大人組は幼年組と、中島姉妹とティアナはエイミィ達やアルフと共にいる。

出店は、やはり他と大して変わらないラインナップである。
ただ一ヶ所だけ人だかりができていた：「甘味処翠屋出張店」。

海鳴市商工会からここ数年依頼があるらしく、特製の冷たいスイーツで大人気となっているらしい。

ちなみに潮祭り期間前後の翠屋は16時で閉店。

「ちよつと行列多いねえ…それでも並ぶ？」

「なのは、何言ってるの…私達も売り上げに貢献してあげないと」

「…せやな、しょっちゅう翠屋行つとるんやし。」

こんな時だけ無視はできんからなあ？」

「同感ね、常連としては是非新作を試してみたいし」

「でもちよつと時間かかりそうだよ？」

全員で並ぶ必要は、ないんじゃないかな」

私達も行列に並び、30分待ってようやく買えた。
見た目は他でもありそうだが、そこは桃子さんだ。
程よく上品な甘さでとても美味しい…他のが、物足りなくなるくらい。

出店にしてはかなり良心的な価格設定なのも、人気の秘密のようだ。

「相変わらず、桃子さんのスイーツは絶品よね。最高級品にも決して負けてないわ……」

その後も食べ物系祭り出店の定番、焼きそばやかき氷といった屋台を回っていく私達。

明久達他のグループも同じように、いくつもの神輿を見物しながら屋台を回っていたようだ。

「…あれ、あそこにいるの明久君達じゃない？」

なのはがとある出店の前にいる明久組を見つけた。

どうやら年少組と合流したらしい。

カレルとリエラに応援されながら、金魚すくいに挑戦している明久と雄二。

折角なので私も混ざる事にした。

やや強い5号を渡されたので、それよりも弱い6号に交換してもらって挑戦。

「…よ、っと……！」

2回目の挑戦で取れた。

しかも2匹同時に。

取った金魚は、欲しかったリエラに預け散策を続ける私達。

射的に苦戦するシグナムと遭遇し、面白いので最初は見ていただけだった。

だが突然『やってみろ』と言われ、仕方なく私もやる羽目になった。

6発500円と決して安くはないが、かなりいいものが揃っている。具体的にゲーム機とか。

ただそういうのは代わりの商品に当てる…実物だと、壊れるかもしれないし。

「こういうのは気持ち上の方に当てると…」

言いながら射的銃を構え、コルク弾を撃つ。

狙った札…ゲーム機やそのソフトと交換する…に命中して、見事棚の裏へ。

「おー、一撃で落とすとはやるねえ…それじゃこれが賞品だよ」

射的屋のおじ…いや、お兄さんから当てた札の景品を受け取る。

凄まじい人気を誇り品薄が続いている有名シリーズのソフトだった。

その後、更にね こ このフィギュア他幾つかの景品をゲット。

普通に買えば総額で1万を超える。

取りすぎて睨まれるのも、面白くないしね。

こんな感じで、なのは達や他の人達に感嘆されながら祭りの夜を満喫した。

2日目と3日目はなのはと一緒に翠屋の出店を手伝う事になった私。初日より更に長い行列ができていたような気がするが…。

多分『美少女2人が出店に立っている』…とでも噂が広まったのだろつ。

なのはは確かに『美少女』だけど…私は、そんな風に言ってもらえるほど立派な人間じゃない。

また話が脱線したかな。

とにかく私となのはが店に立っている間は、死ぬほど忙しかった。なのはが調理、私は接客と役割を完全に分け対応したため少しだけマシだったのだが…。

翠屋の正規従業員が応援に来ても客足は衰えず、結局祭りが終わる夜10時過ぎまで休まず応対する羽目になった。

…最終日となる4日目には『浴衣美人コンテスト』と言う名のミスコンがあると聞かされていた。

しかも、また私の知らないところで勝手にエントリーされていた。…はやて達には、後でO H A N A S H Iをしておかないとね。清涼祭の時と違い、今度はなのは達も出ている。

出場者が姿を見せる度に、審査員や観客からの歓声が上がる。

私の時は距離が近い以上に歓声が大きく聞こえた。

私以上に魅力的な人も結構いるというのに。

結果は…審査員達の印象が良かったのか、僅差で私が選ばれてしまった。

どうやら、資料に書かれていた『文月で人気の生徒』というのが決め手だったと審査員が言った。

嬉しいと言えば嬉しいんだけど…こういう称号とかはあまり興味ないかな。

そんな訳で、色んな意味で大変だった今年の潮祭りも終わった。
夏休みはまだ続くものの、2学期の始業式までずっと家に居たいと
思えるほどに疲れてしまった。

くおまけく

(Trrrr...)

「…あ、土屋君？」

突然「ごめんね、頼んでいた写真なんだけど…」

『…既に全部できてる。』

「いつ受け取れる？」

「いつでも…それなら明日渡してくれる？」

『…わかった、明日海鳴の中央図書館で』

翌日。

「ごめん、待たせちゃったね？」

「…大丈夫、問題ない。」

「これが要望の品」

「……うん、確かに。」

「…じゃ、これが約束のお礼だよ」

「…少し多い」

「気にしないで…リスクを背負ってるんだから、その対価だよ？」

「…わかった」

そこで2人は別れる。

夜…『依頼人』の家。

「…はうう、カッコ可愛すぎるよお。

やっぱりフェイトちゃんは十分魅力的だな…」

フェイトの、色々な写真で悶絶する少女・なのは。

年度開始から潮祭りまでの様々な写真がある。

この末期症状ぶりは、早く何とかした方がいいのかもしれない。

風物（後書き）

… 何だこのグダグダすぎる文章 W W W

スバルとギンガ、キャロの名前が違うのは仕様です。

次はどうしようか、思案中です。

ネタがないんですよ…。

歌は権利があるから迂闊に載せられないし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3201u/>

バカとテストと金の死神～文月学園リリカル騒動記

2011年10月8日15時45分発行